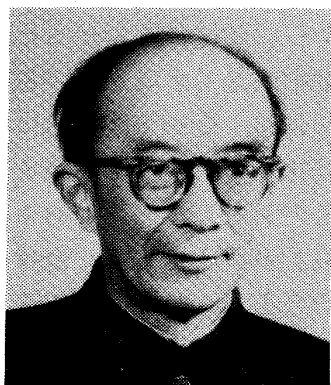


# 中国近代図書館界の巨匠：劉 国鈞の肖像

—— その多彩な業績をめぐって ——



劉 国鈞  
(北京大学より拝受)

児玉 孝乃 山内 弘江 松見 弘道

## 序に代えて

『晋書』劉毅伝に、“丈夫蓋棺事方定”ということばがある。唐の杜甫『贈蘇侯詩』や、韓愈『同冠峽詩』などにもまた、これを受けた同じ語句が引かれている。いうまでもなく偉丈夫の価値は、棺の蓋を覆ってから、つまり死後になって、はじめて決るものであることを戒めた警句である。

本稿の筆者のひとり松見との因縁浅からぬ劉国鈞先生が、黄泉の旅に立たれるや、中国の図書館関係誌で管見するだけでも、次のような3誌に、いち早く追憶記事が掲げられ、北京大学葬のもようなどを報じた。

武汉大学；『図書情報知識』1980 No.2 P.50—51

中国図書館学会；『図書館学通訊』1980 No.3 P.34—35

科学出版社；『図書情報工作』1980 No.5 P.38

この一事でも、劉老師の偉丈夫ぶりがしのばれるのであるが、あたかも7回忌に当る今日このごろ、かずある業績のうち、未発表であった旧稿を、高弟たちが整理し、次つぎに発表されている実状に接するとき、ひととき偉大であった老師の人がらが窺知される。なかでも末学の松見にとっては、かねて4たび先生の高著を翻訳、出版させていただいたゆかりもあって、後

章でも触れるように、30余年にわたり、何かと指導をたまわってきた恩恵の深さは、肝に銘じて忘れられない。

このような契機で、これまでもそれぞれの角度から、老師の紹介記事を公にしてきた<sup>1)</sup>が、かたわら、その膨大な業績を拝読し、訳稿をしたためているうち、不知不識の間に、ずいぶんな分量に及んでしまった。

かかるいきさつのところへ、早くから劉師と交流のある、中国文化学院図書館研究班編『社会主義図書館学概論』(JLA; Information Service N.S. Vol. 2 No.1 1961)の訳者のひとりである佐々木敏雄(日比谷図書館)、中国図書館学研究家の橋本紘治(中央大学)両先生らから、老師の業績を幾分でも取りまとめて公表してはとの勧めをたまわってきた。一方では、この意向に関して、老師の高足の御弟子でもある鄭女史や、現武漢大学図書情報学院黄宗忠副院長からも、海を隔てての激励も受けている。よって本誌を借りて、僭越ながら執筆することを思いついたのである。

しかしながら何ぶんにも、かなり積もった手元の資料や、日中の諸氏から恵与された文献等を前にするとき、なみなみならぬ役割りを察知するあまり、乞いてここに児玉、山内両女史の助力を得ることができたので、鋭意草稿することに決し、まずは関係資料の分類から始めて、取捨、内容の組織だて、表記法などで検討を重ねながら、両3年を経てきた。

もとより不備ながら、ようやくにして完稿し終えて、おおかたへの紹介と、示教を仰ぐ運びとなった。紙幅のこともあって、各項不ぞろいのきらいもみられるが、足らざるは別稿にゆず

ることを諒とされ、叱声をたまわりたいと思う。

## I 劉 国鈞の人となり、経歴

かれが、中国近代図書館学発祥のメッカであるといってもよい金陵大学を卒業して、図書館に奉職しようと目指したのは21歳のときであり、中華人民共和国が建立して、中国悠久の歴史上に、エポックメイキングを画したおりは、まさしく、かれ50歳のときである。

かくしてみると、21歳以降81歳に及ぶ、図書館人としての波乱に満ちた60年の生涯のうち、その前期の30年間は、1919年の政治運動でもあり、また一種の文化活動でもあった五四運動の勃発とともに、中国は新民主主義革命の時代へと進入していったときである。さらにいってみれば、まぎれもなく図書館界も、蔵書樓的な封建的管理思想では適用しなくなって、やがて中国近代図書館への改革運動に挺進しなければならなかった時代である。

ひるがえって後期の30年間は、旧来の封建主義、帝国主義、ないしは官僚資本主義を推翻して、社会主義革命と社会主義建設という現代化への路線に沿って、図書館界全体が、マルクス・レーニン主義で武装して、軌道修正を迫られてきた、重大な時期であったといえよう。

しかも、かれの活動の拠点となったのは、前期は金陵大学であり、後期は北京大学であったことも、見逃せない、顕著に対比できる特色であると思う。

そこで、かれが中国図書館界に君臨してきた、半世紀以上にわたるその生涯を語るときは、取りまく時代的背景を抜きにしては、その真意は尽せないであろう。生涯活動の舞台であった中国国家の土壌を踏まえたうえでの経歴であり、図書館学思想であり、図書館活動であったからである。このような土俵上の取組みを念頭に置いて、まずかれの人となりを顧みてみたい。

**前期**——“扶清滅洋”のスローガンを掲げ、“替天行道”の大旗を押し立てて、12歳から20歳代の婦女子を含む青少年を主力部隊にした戦

闘集団が蜂起したのは1899年のことであった。

いわゆる義和団運動の興起した年である。かれはこの動乱のさなかに、江蘇省南京市で生まれた。字は衡如。

その後の同志でもあった後述する杜定友<sup>2)</sup>はその前々年に、広東省南陽で、また8年前には、のち台湾へ渡って蒋介石の領袖にまでなった王雲五<sup>3)</sup>が、同じく広東省中山県で生誕している。

これらの3氏はいずれも、やがて20世紀における中国図書館の近代化、現代化への路線を開拓し、それぞれの立場で貢献した同志である。

劉師は、地元の金陵大学へ入学した。金陵の名は、いわば南京市の古名で、戦国の楚以来、2400年の歴史を誇る古都であり、江南の政治、経済、文化、交通の中心地でもある。1911年創設の大学は、18年春、新校舎の落成とともに鼓楼に移った。図書館<sup>4)</sup>は、13年に来華した米人で、プリンストン大学図書館参考部主任であった、Harry Clemons が館長に着任したことによって、当時としてはきわめて進んだ運営がなされていた。

22年には、伝統的な封建時代からの蔵書樓界において、管理組織も総務、中文編目、西文編目、流通、期刊小冊の5部から成っていて、すでに大学の行政単位内に置かれていたのも、Clemons の手腕にほかならない。

20年に卒業し、しばし母校の図書館に就任して、進歩的な図書館運営に身を投じたのも、劉青年学徒が魅力を感じたからであろう。

かくして Clemons の勧めや、より専門職としての知識を習得することの必要性を痛感したかれは、アメリカのウィスコンシン大学哲学系に入学して、さらに図書館専科学校および研究院まで進んだ。業を終えて25年には、哲学博士の学位も修得して卒業、帰国した。

母校である金陵大学に復帰して教授となり、一方恩師Clemonsによって管理組織の確立された図書館の中文部主任をも兼務することになった。着任するや、毎月1回、館内連絡会議を開いて、その議事録を公布するなど、米国式民主的運営に乗りだした。

さらには後述するように、歴史的ともいえる

中華図書館協会が成立すると、第1届出版委员会主任に選任され、『図書館学季刊』編纂委員長に選出された。弱冠26歳のときである。

以後20数年間の、いわゆる前期は、かねて詳述したこともあるように、中国の図書館人にして、海外留学を終えて帰国してくる多士済々が割拠したこともあって、館界はにわかに活況を呈し、ある意味では混迷期を迎えることになった。かかる時勢にあって、かれの晴れ舞台も、めまぐるしく変転してゆくことになる。一方では、蒋介石が27年、眼の前の南京で国民政府を樹立したことをも体験しているが、思えばいきなりその局面に立ったことも、事実である。

ともあれ母校に在任すること4年、29年には北上して北平（のちの北京） 図書館編纂部主任に迎えられ、かたわら北平師範大学教授も兼任した。

北平に留まること2年にして、金陵大学に帰って13年間、図書館長、文学院長、秘書長として要職を歴任し、母校の図書館、ひいては大学の興隆、発展にも尽力したのである。

ところがその間には日中戦争が勃発したため、南京は、鬼子符とののしられた日本軍のため、阿鼻叫喚のちまたと化し、39年には金陵大学も、不幸にして四川へ疎開せざるを得なかった。はかり知れぬ辛酸をなめられた苦勞話については、とても筆舌には尽せない。

この逆境期にあって劉師は、ひたすら建安時代の、政治思想などの研究に打ち込んだのであった。『曹操与其時代之思想』、『歴史哲学之需要』、『建安時代之人生觀』、『建安時代之政治思想』、『今後辺疆教育應取之方針』、『中国文化之発展』等、10篇あまりに及ぶ、およそ異色の作品を公刊しているのも、一段と興趣が沸く。

43年に国立西北図書館の設立準備計画が開始されると、その委員長に任ぜられる一方、西北師範学院教育系教授、中央大学教授をも併任した。翌年ようやく開館すると、その館長に選任され、同時に蘭州大学哲学系教授を兼任した。

ときまさに日本軍の侵略があり、他方また激動する軍閥間の内戦で、人民全般が苦悩の坩堝に追いやられている最中で、劉師も臥薪嘗胆

の日々が続いた。

おりからその11月には、アメリカのハーレー特華特使と毛沢東との会見が延安で成就し、翌45年4月には、共産党七全大会が開催される運びになった。かくしてここに8月、日本は、“ポツダム宣言”を受諾したことは、生なましい現実である。

日本軍降伏、中ソ友好同盟条約締結、毛沢東・蒋介石会談、内戦回避の声明といった、走馬燈のような社会構造の動きに、それこそ解放前夜までの数年間こそは、もとより著述するどころのさわぎではなかった。

後期——劉師生誕してあたかも半世紀の49年10月1日は、こもごも織り成してきた悲喜劇性横溢場裡の緞帳がするすると上がるや、中華人民共和国誕生のハイライトに、目がくらむばかりの吉日であったといっても、過言ではなからう。

ときの総人口の8割ともいわれる4億8千万人の農民まで挙って、晴ればれとして、社会主義国家建設の鋏を打ち込むことになった。ひとり図書館界に焦点を絞っても、まずはマルクス・レーニン主義路線へと飛躍した、新生中国を目指すモデル図書館建設の動きが生じてきた。蘭州図書館もそのひとつであって、あたかもその推進者として、地元の蘭州大学から劉教授を抜擢して、副館長に迎えたのである。

われわれ日本人として学ぶべきは、就任した毛沢東主席、周恩来首相の領導によって、図書館の振興に偉大な力量が発揮された快挙についてである。

まず政府は、文化省に図書館局を設置し、翌年には、中央文化部文物局では、図書分類法会議を召集して、政府自らの手で、新分類法を制定する意図を示した。その主役として参画した劉師は、直ちに『中国図書分類法簡表及其理論』（『文物參考資料』8期）を発表して時流に呼応したのは、すでに20年以前に公表し、主要な図書館で採用されている分類法を、著しく修復して、当面の金字塔を高らかに掲げなければならなかったからに、ほかならない。

思えば、かねて中国共産党結成時からの大立物であり、五四運動推進の指導者でもあった李大釗が、北京大学教授兼図書館長であったころ、当図書館職員として勤務するかたわら、マルクス主義理論を聴講、学習したのが、ときめく毛沢東である。この北大の図書館学系は、戦時中の2年制から4年制に改組され、そこに専修科が設置されると、劉師は専任教授として招聘された。51年8月、かれ52歳のときであって、かくして由緒あるこの大学を舞台に、中国図書館現代化の理論と技術を引進する急先鋒として、終世、かれの生涯を捧げることになった。

解放以来からの約10年間における中国図書館界は、後述するように、ソ連の理論と経験を輸入することに懸命であって、関係の訳書や論文が氾濫する勢いであった。解放2ヵ月後には、毛主席はモスクワを訪問し、翌2月に、中ソ友好同盟援助条約が締結したのが引き金になっていることは、いうまでもない。

聞くところによると劉師は、きわめて短期間にロシア語を自学自習されたといわれる。なるほど53年から7年間に、10篇あまりの翻訳をはじめ、モスクワ大学やカザリン大学の紹介記事を公刊している。当時の新中国図書館事業の建設に、相応の貢献をしてきたというべきであろう。

ちなみに当時創刊された機関誌『図書館』、『図書館通訊』、『図書館工作』、『中国科学院図書館通訊』、『文物参考資料』等を瞥見しても、関係の労作が圧巻的である。

**実践活動**——劉師について語るに際して忘れられないのは、かれは単なる象牙の塔にこもる閉鎖的な理論家ではなく、常に10指にあまる役職を兼ねながら、大学外においても活動の場が開かれていて、しかも国家的な責務を負荷されていたリードオフマンでもあったことである。

例えば前期のばあい、アメリカから帰国して4年めに発表した『中文図書編目條例草案』(『図書館季刊』Vol. 3 No. 4 PP. 437—508)は、中国における統一目録規則の必要性を痛感して、金陵大学における実践活動を通して誕生したものである。よっ

てこの予備版を各館で使用したうえで、不断の改訂を経て、はじめて単行本として刊行した。同時に発刊した『中国図書分類法』も、同様の手続きを経たものであるが、いずれも解放前まで広く採用された権威書であることについては、後述したい。

後期における実践工作の一例を挙げたい。かれは北京大学へ就任するや、北京図書館の顧問を兼任して、毎週同館へ出向することを堅持していた。ここでかれは、分類や目録作業中に起っている諸問題に対しては、丁丁発止の議論を闘わして、その成果を累積し、分析し、概括を通して条理化するのが常であった。53年に開明書店から出版した『図書怎樣分類』は、該館における工作中に遭遇した諸問題を基礎にして系統的に論述したもので、後述したように、解放直後の混乱期に放ったハンドブックとして、中国全土から迎えられたことは、当然であるといってもよい。

**中華図書館協会(LAC)の成立**——中国の図書館専門組織としては、19年に北京図書館協会が発足したのが嚆矢<sup>7)</sup>であって、そのほか南京、上海、江蘇、天津でも相ついで発会していたが、ここにおいて全国的な連絡組織の必要性が叫ばれるなかで、まず22年に、ようやく中華教育改進社が図書館教育委員会を設置して、推進母体とした。

かくして25年3月、ALAより Marry Elizabeth Wood女史が派遣されて統一組織結成の機運が高まり、かねて述べた杜定友らの肝いりで、4月25日に上海交通大学で召集された成立大会で組織大綱が通過し、6月2日に北京で創立総会を催すことができた。アメリカから帰国して金陵大学へ赴任したばかりの劉師の姿もそこに見られた。フィリピン大学から帰国した杜定友が28歳で執行部長に、26歳の劉師が出版委员会主任に選出された。

さて発足したばかりのLACからは、すぐさま『会報』が、学術誌としては『図書館学季刊』が創刊されたのは、翌年3月である。欧米のそれに精通している劉師が、蘊蓄<sup>8)</sup>を傾けた編集

ぶりを、一目で理解される。

まず見返紙の筆頭には、かれの筆に成ると見受けられる本誌発刊の宗旨が出ている。

本新図書館運動之原則、一方参酌欧美之成規、一方稽攷我先民對於斯学之貢獻、以期成一種合於中国国情之図書館学。

以上に続いて掲載の範囲、投稿規程 8 カ条を掲げているが、その第 8 条は、“来稿及一切通信、請寄編輯主任劉衡如君収。通信處、南京金陵大学或東南大学図書館転。”で終わっているが、編集責任者としての、面目躍如たる一面がうかがわれる。

この創刊号のグラビアを飾っているのは、“中華図書館協会成立式全体撮影”と銘打った写真である。日米からの来賓も含めた約 70 名のうちには、Wood 女史とともに、若き日の劉青年の英姿も見受けられて、感慨ひとしおである。

ついで論文執筆陣容 14 名分を一覧するとき、ここにもまた劉師のなみなみならぬ手腕のほどがのぞかれる。まさにときの中国政界も含めた各界の権威者が、くつわをそろえている。

巻頭には、かつての大政治家であって、恩師の康有為とともに、いわゆる戊戌政策を引き起して、日本へ亡命したこともある梁啓超の『仏家聖録在中国目錄学上的位置』を筆頭に、26 歳で北京大学教授を勤め、のち駐米大使や北京大学長も歴任した胡適や、その他、海外留学より帰国した林語堂、洪有豊、袁同礼、戴志騫ら、堂々たる顔ぶれで、豪華絢爛そのものである。

劉師自身はといえば、もちろん編集陣の重鎮として、さすが各号に常連として、論文以外にも書評、紹介、翻訳のたぐいが多岐にわたってながめられる。奇しくもその翌年には、日本で青年図書館員聯盟が結成され、さらにその翌年には機関誌『圖研究』が創刊されたが、劉師はいち早く『季刊』誌にその紹介の筆を執っている。ついで間宮不二雄大人の功績を称えている一幕にも注目される。ところが思うにこの聯盟誌も、大東亜戦争のため 43 年を最後に、悲痛きわまりない廃刊宣言を残して、16 年の薄命にて非業の淵へ追いやられてしまった。

しかしながら一方の中国においては、それよ

り早く、一時代を風靡した『季刊』誌も、戦争が勃発した 37 年（11 卷 2 期）には廃刊の憂き目をみなければならなかった。それもこれも日本軍閥の侵略戦争という一大悲劇が、無念にも破滅させてしまったのである。知己の間柄であった劉師と間宮大人の胸中やいかにと、われわれはしみじみ追憶されてならない。

## II 輝やかしき業績

### 1. はじめに

20 世紀初頭にはじまる劉師の生涯は、まさしく伝統と新風、解体と再生、苦悩と光明、破壊と建設の連続であり、止むことない繰り返しの、文字どおり革命の歴史であったともいえる。

すなわち社会、政治、教育、経済、軍事、外交、文化等々、どの部面をながめても、あまりにも急激に変貌した時代であったことは、否定できない。このような実社会を度外視しては、かれの生涯は筆舌にし難く、むしろまた劉師日常の教育姿勢も、学術研究や実践活動の態度も、すべてにわたって、破乱万丈の世相を背負い込んだ、史的唯物主義に立脚しなければならないと、逝世まで強調していた点にも注目される。

よって本章で、かれの業績を回顧するに当たっても、さきにも触れたように、座標を解放時に置いて、対照的な前、後期の両面を下敷きにしつつ、実践活動部門は前項に、教育指導部門は別項に譲って、公刊されている代表的労作を取り上げて、以下の見出しで、紙幅のこともあるため、つとめて全貌を略説することに視点を向けた。

なにしろかれは、大学卒業の前年、早くも『近代図書館之性質』（『世教新潮』No. 9）を発表したのに始まり、以来 60 年の執筆活動の最後ともいえるべき逝去の前年には、死期も迫った病床で、『分類目錄主題索引編制法』の校訂作業を、呻吟しながら続けておられたことを承っているが、われわれは齊しく、永眠するまで、精魂を振り絞っておられたさまが読みとれて、いたく感銘を覚えるばかりである。

さればこそ、没後のいまも、高弟たちによっ

てその遺稿が整理され、幾篇か公表されているが、生涯かけてものされた著書、翻訳、論文のたぐいは、200種にも及んでいる事実には、敬服されるばかりである。

しかもこのほか、名だたる遺弟の編集によって、未発表の訳文目録が紹介されているが、類別してみると、①米国図書館界の機械化、自動化を紹介したもの13点、②目録の国際標準化に関するもの3点、③分類および目録に関するもの3点、④図書館教育に関するもの4点、加えて、欧米のみならず、最近のソ連に関する『蘇聯図書館事業發展的新段階』の翻訳までもが見受けられて、思わず襟を正さざるを得ない。

老師の著作に対する姿勢を評して、こもごも、謹厳、思想敏鋭、剛毅情勢、闡述明快であったという畏敬のことが与えられているが、さてここではその代表作のみ玩味してみたい。

## 2. 図書館職員の心得と、その養成

アメリカから帰国したかれは、今度は責任者として母校の図書館へ着任したが、おそらく在米時代との間に違和感を覚えたことであろう。

翌年創刊したばかりの『図書館学季刊』(Vol.1 No.2 P. 366-7)に、おりしも今秋6日間にわたって、フィラデルフィアにて挙行されるALA 50年記念の模様を掲げて、創立当時の会員数104人が、現在は6745人に到達するほどの盛況ぶりや、来るべき今回の多彩な催しを紹介して、発足したばかりのLACに鞭撻を掛けたのであった。

続いて同誌次号(P541-43)には、『美国図書館学教育之新發展』を登載して、まず名門校であるコロンビア大学図書館学院の紹介を行った。

すなわちアメリカにおける図書館教育の發達はさすがにめざましく、人材養成の専門学院および大学附属の専門学校はすでに13校も数え、年々増加の傾向にある。そのうちこの学院は、Melvil Deweyが1887年に創設した世界最初の図書館学校で、2年後にはアルバニーのニューヨーク州立図書館と合併したものであって、現在、C. C. Williamson 博士が主任教授で、その他2人の教授と3人の助教授を擁した模範校であるむねを紹介して、最後を次のように締めて

いる。

歴史悠久、声誉卓著、今自動合併於哥校、足見主持其事者、但図書館事業之發達、而不顧已得之權利、其眼光之遠大處事之公正、実有足為吾人矜式者也。

と。つまりデューイの遠大な精神を賛嘆するとともに、劉師の脳裏には、国内にもすでに本校を卒業した先輩も多々あるが、中国斯界の發展のため、互いに理想像とすべきであるとの思惑がうかがわれる。

さらにミシガン大学図書館学科では、図書館学文学士および図書館学修士の学位を修得できるようになって、主として公共図書館の人材を養成する機関が多いなかで、このたび図書館学者養成の特異な大学が生れたことを、簡略に紹介しているが、かくしてまず、帰国早々啓発的な筆を執った。

続いて翌年には G. A. Works の著 “The Graduate Library School of Univ. of Chicago” と、E. L. Cook の “Essential in Training for School Librarianship” との文献紹介を行って、中国における人材養成の必要をうながしている場面もある。

次上は同じような目的で紹介を主とした記事であるが、帰国後5年めになると、将来を展望した図書館、ならびに職員のありかたについて、アメリカで培ってきた色濃い図書館体験がにじみ出てきて、ここに、『図書館内之参考事業』<sup>10)</sup> および『図書館員应有之素養』<sup>11)</sup> という、2篇の論文を相ついで発表した。著しく立ち遅れている図書館界に新風を送り込んで、奮起を促したものと評価される。

なかでも前者は、その書き出しによると、“何期予自今春以来、驟感神經衰弱、不能多所構思”と、不例のなかで講稿に筆を加えたもので、主としてアメリカにおける参考業務の実態に基づいて、自国では未開発の分野に歛を入れたものと理解される。畢竟するにレファレンス・ワークの歴史的回顧にはじまって、レファレンス・ブックや質問の内容分析、相談室の位置、対応の方法などについて、具体的に描写している。

後者は、32年に浙江省図書館で行った講演の

要旨を筆にしたものであって、図書館職員は、かくあるべき旨を訓戒した記事である。つまり①自館の内容を熟知し、②地域社会の状況を調査し、③忠実に自己の学識の長短を知り、④利用者に対しては和藹<sup>あたたか</sup>（柔和）の態度を持し、⑤豊富な常識を養い、⑥耐忍の心を忘れず、⑦図書館学の基本的知識を身につけるべきである条々について、ねんごろに論している。

とりわけ力説して“若重遭声色，或冷淡相加，其哀心必受打撃而却歩”，“尤須和藹接待，指示其疑難，徐徐以商榷之態度”と、まさしく仏典（大無量寿経 上）でいう“和顔<sup>わげん</sup>愛語”の心備えをもって、閱者に接遇すべきことを強調していて、この項は詳細である。

初心者や躊躇している入館者には懇切、穏やかに応対し、自身の書齋に入るがごとく心遣いをし、利用指導に当っては自ら謙遜を倍加して、いやしくも軽惡の口吻<sup>くふ</sup>があってはならない。

すべからく“平心静気，和顔悦色，以待来者”の構えを堅持すべきである。それこそ一館の名誉，優劣にかかわるからであると、平たく説論されている。

要するに、豊富な常識を養うことと合せて、和顔悦色の態度は、図書館職員としての必須の要件であると結んでいる。

この一文が出てからあたかも30年後、つまり<sup>12)</sup>解放後の62年に『也談談図書館工作者的基本功』が発表された。これも図書館職員としての基礎的なサービスの態度について述べたものであって、必備の素養や心構えを挙げているが、その間には時代の流れはあっても、屋台骨については、前後狂うところはないといってもよからう。

しかしながら社会環境の変遷と、図書館技能の進展に伴って、図書館学の基礎的知識の範囲が広がってきたため、対応する技能も広範、多岐に展開している点を指摘している。すなわち歴史、地理、文学に関する知識、科学や書誌学に関する理解、レファレンス・ブック運用の技術、なかでも外国語精通の必要性にまで説き及んだものである。

つまるところかれは終世、人材養成のため、大学における教育のみならず、業余学習や通信

教育にまでたゆまざる努力をし、職員の資質向上にまで気配りされていたのも、ひとえに“人材は物質的財宝に比べて、さらに貴重である”という信念の発露にほかならない。

### 3. 図書館学の研究対象

図書館学の研究対象に関する劉師の著作で、すこぶる影響力を発揮したものとしては、前期に出版された『図書館学要旨』と、後期に出た『什么図書館学』が代表されよう。

『図書館学要旨』——この本が発表された、その背景から眺めてみなければならない。

かねて触れたように、道光、咸豐時代（1821—<sup>13)</sup>’61）になって、通商や伝教のため、中国へ渡来する人士が目立ってくると、勢い西欧の文物が日ましに輸入されてきた。

近くは、さきにも挙げた Wood 女史が来華して、1903年に文華公書林を起し、10年前後には河南、広西、四川、雲南等の各図書館を創設したが、もとよりDC法やLC法を導入して、広く民衆に開放した。いわば中国の封建的な蔵書楼式管理法に、大きな波紋を投じたことは、いうまでもない。

この時流に啓発され、刺激された進歩的な図書館人士は、20年代ともなると、次つぎに西欧の図書館学校へ遊学する者が跡を絶たなかった。

当然のことながら、先進の理論と技術を学んだ人びとが帰国してくると、その土産は、図書館学理論や技術に加えて、図書館用品や事務機器であり、洋書や外国雑誌の導入であった。

このような情勢の風圧を受けて、中国図書館界にはわかに活況を呈し、他方では混迷と、その打開のため、百花争鳴の状態であった。

とりわけ著名な碩学によって、DCやLC、あるいはALA等を下敷きにした中国式図書分類法、目録規則、図書記号法の発想が、競って誕生したもの、勢いの赴くところである。

さらに30年代になると、図書館事業の理論的基礎を追求し、いわゆる“要素説”を発表する風潮が生じたのも、このような影響を受けてのものである。フィリピン大学から帰国した杜定友は、『図書館管理法上之新観点』の中で、3

要素説を打ち出した。その骨格を示せば・

整个図書館事業，其理論研究可稱為‘三位一体’。三位者，一為‘書’，包括図与書等一切文化記載；次為‘人’，即閱覽者；三為‘法’，図書館之一切設備及管理方法，管理人材是也。三者相合，乃成整个之図書館。

32年のことであるが，その翌々年には，劉師が以下に述べんとする『図書館学要旨』（上海 中華書局）を発行して，図書館学の研究対象として，4要素説を展開したところから，いちずに反響を呼ぶことになった。

やがて李景新が『図書館学能成一独立的科学碼？』（『文華図書館季刊』Vol.7 No.2）を発表して，図書館学を歴史的と系統的の2大範疇に分ち，前者はさらに図書学史，図書館史，図書館学史の研究を包括し，後者は理論的，および實際的図書館学の2部門に分ける図式を示した。

ついではこの李氏説は要するに，台湾の国立師範大学王振鵠図書館長も指摘しているが<sup>14)</sup>，ドイツのハイデルベルグ大学教授Jochim Kirchnerが *Bibliothekswissenschaft* (1931) で掲げた体系と，きわめて共通するところがある。代表的なこの3点に加えて愈爽建も杜氏同様に，3要素説を，その翌年『通訊』誌上に掲げたが，図書館学を組成している諸要素を分析して，その研究対象を総括しようとする気運が，澎湃<sup>15)</sup>として館界を風靡するようになった。

武汉大学図書館学部の黄宗忠部長も，当時を回顧して

總之，從“五四”運動開始到三十年代，図書館学基本理論的研究已取得一定成效，為當時図書館学的發展起了一定的作用。

と評論しているが<sup>15)</sup>，いまにして判断できることは，旧来の伝統的な思想基盤に培われてきた人士が，ひとたび先進諸国の図書館事業を学習して，ふたたび母国に帰ってみて，思わず主張せずにはおられなかった事実にはほかならない。ともあれ劉師説が導火線ともなっていて，なだれ現象のごとく，その研究姿勢に拍車を加えたものと解釈される。

さてここで劉師が，該書を発刊した背景，ないしはゆえんについては，さらに検討しなければ

ならない。

さきにも挙げたWood女史が来華中，20年に，武昌の文華大学には図書館学科が創設され，続いて劉師の出身校であり，のちまたこの図書館長に就任した金陵大学にも，図書館学部が設置されたことは，周知のとおりである。

ときまさにこの金大を事務局に，『図書館季刊』が創刊されたのは26年であるが，その編集者は劉師であり，杜定友であった。しかも創刊号以来の執筆者のなかには，ニューヨーク州立図書館学校の卒業生である裘開明，沈祖栄，李小縁，洪有豊，戴志騫，袁同礼等，少壮有為の碩学が，きら星のごとく陣取っているさまに気付かされる。

そこで想起されるのは，23年当時の図書館長はMary W. Plumerであった。ときにPlumerは，ALAより“*Training for Librarianship*”を発行しているが，その書中で，図書館学の体系を述べるに当たって，管理，技術，目録学，選択の4科目を支柱として展開している点に注目される。そこでさきに掲げた卒業生たちは，いずれも直接，間接 Plumer 校長の薫陶を得ているむきは，否めないであろう。アメリカ育ちの劉師が，かれらと相互に意志の疎通があったことも，疑義を差し挟めない。

してみると一方では，あたかも2年前，親友であり，討論の同志であり，ともに『季刊』誌の編集者であり，協力者でもあった杜定友が，3要素説を公表したばかりである。

ちなみに劉・杜2氏の間柄を表示してみると，次のごとき好対照がうかがわれる。

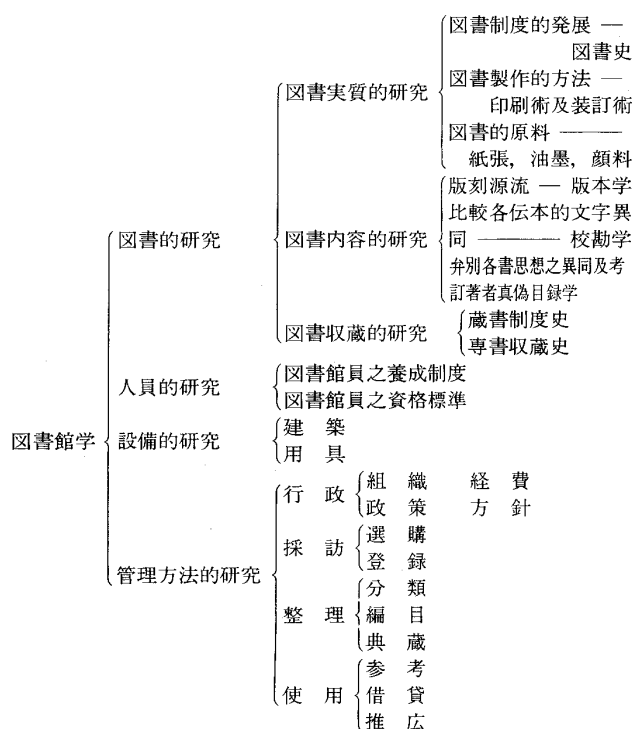


杜 定友  
(中山大学図書館  
連珍館長より拝受)



区 分	生年	卒年月日	留学先	帰国年	当時の活躍地	当時の勤務校	後期の勤務校	分類法の発表年	要素説の発表年	学 位
杜定友	1897	1967.3.13	フィリピン大	1921	上 海	南洋大学	中山大学	世界図書分類法 1925	3 要素 1932	文学士 教育学士 図書館学士
劉国鈞	1899	1980.6.27	ウィスコンシン大	1925	南 京	金陵大学	北京大学	中国図書分類法 1929	4 要素 1934	哲学博士

そこで、このような実状を念頭に置いて、とりわけ反響の大であった劉師の主張を転記すれば、次のようである。



以上の図式のとおりであるが、劉・杜両氏のそれを比較したばあい、杜氏の3要素のうち、“法”の範疇が、劉師のばあいは、設備と管理方法の2類に展開したものと解釈される。よって図書館学の研究対象としては、30年代初期までにおけるアメリカの風潮と、劉・杜両氏のそれは、基本的には、なんら誤差はないといっても、過言ではなかろうと思う。

前述した王振鵠が中国図書館学史を論説するに際して、“*The School of Library Service at Colombia*” のカリキュラムを引用しているが、この章を結ぶに当って

目前各国對於図書館学的研究，多循此途徑發展，僅有課程範圍の広狭与重点的不同而已。我国図書館学的研究，深受美国的影響。現図

書館系，所所開課程及研究方向，亦不脫離這一範圍，形成了現代図書館学的標準型式。

と評して<sup>16)</sup>、現代の中国における図書館学研究は、アメリカから受けた影響がすこぶる大である点を強調している。もとより台湾の立場から述べた論評とはいえ、あながち中国大陆のみならず、われわれ日本の局限からいっても、まったく変わるところはないと断定できるであろう。

ついでには後述するように、いまだ P. Butler の刺激を受けることなく、あくまで *Library Economy* ないしは *Lib. Administration* という語で代表されるごとく、ときの社会構造からみて、実際的要求、現場の実践活動に即応する知識、技能の高揚、錬磨に視点が置かれていた当時の実情が思い知らされる。所詮、さきに王振鵠が『図書館学要旨』を評して

劉氏所列の研究範圍，欠乏於図書館社会価値与功能体認，偏重於實際的觀點。

と、端的に短所を指摘しているが<sup>17)</sup>、いってみれば中国の解放を契機に、国情が転換するまでの過渡期の所産であって、この時代の館界にあっては、すこぶる進歩的な学風として迎えられ、まぎれもなくセンセーションを呼び起した労作であると、われわれは高く評価したい。

『什么図書館学』——中国が解放されるや、あらゆる分野において揺れ動き、着慣れてきた衣装から衣替えをする必要に迫られ、その対応に官民こぞって躍起のありさまであった。

もとより図書館も例外ではなかった。在来の任務を継承するのに加えて、マルクス・レーニン主義や毛沢東思想の宣伝、党の政策執行への呼応が必要となった。他方では、とりわけ19世紀中葉ころから、多年にわたって蓄積してきた古籍のみならず、洋書、新書、翻訳書までもが雑居するようになって周章狼狽したごとく、共

産主義思想の図書も氾濫するようになれば、急激な対応を求められることは、必然的である。

かかる歴史の流れに沿って、劉師自身にとっても、従来からの中国式伝統のうえに、欧米流を基調とする著作、なかでも分類法や目録法に関する労作は、後述のごとく、新イデオロギーを基礎に、著しくお色直しをしなければならなかった。そこで図書館事業の部門においても、差し当ってソ連の文物を導入し、活模範とすることに必至の勢いであった。

この期におよんで、前項に解説した『図書館学要旨』にも、改訂のメスを入れる必要上、ソ連模倣期の最後を飾るにふさわしい『什么図書館学』を、前著に遅れること23年、期待を荷って57年に発表した。<sup>18)</sup>これが弾みとなって、論議の焦点がここに向けられるようになったことについては、あとにゆずって、まずこれを執筆された意図から検討してみたいと思う。

あたかもこの年の2月、毛沢東が最高国務会議で行った演説のなかで、執政上の大方針を打ち出すとともに、思想、学術上では、“百花齊放，百家爭鳴”を提唱したが、<sup>19)</sup>そのスローガンを受けるがごとく、中国図書館界にあって、“図書館学とは何ぞや”の討論が、堰を切ったように沸騰してきたのも、まさにこのときであった。

果してこの図書館学の基本理論追求の問題は、さまざまな経緯を経て、百花繚乱の勢いであった。いま述べんとする57年までの数年間を、武漢大学の黄宗忠部長は、前幾年間の学習と準備を経過しつつ、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の指導下において、ソ連の図書館学理論を導入したことにより、旧来の理論体系は衝撃を受け、やがて新たな抱負が萌芽しはじめた時期であるむねを、いみじくも指摘して

党和政府、関于過渡時期的文化教育政策，在新的理論大系中，占有相当地位。在新大系中，对図書館学的基本理論，図書館產生与發展的歷史，図書館的性質，作用及其建設原理，図書館的類型等問題，進行了初步闡述。

と回顧しているごとく、いよいよこの問題に対する論議が繰り広げられてゆく世相になった。

このような背景を踏まえて、百尺竿頭に立った劉師にとってみれば、新理論大系樹立のため、蘊蓄を披露したいと口を開いた、というのが真相ではなかろうか。そこでかれの主張する概要に触れてみたい。

中国では図書館学校、学系、学科を設けて、人材養成を計っている。国家としても“全国科学12年遠景計画”内にも、図書館学の一門を設けているにかかわらず、この科学に対する認識が一般に曖昧模糊としている実状であるので、ある見解を提出して、大方の討論、批判を得たいというのが、冒頭の趣旨である。

次にかつての4要素説に対する修復の必要性や、時代情勢の転換のことなど、毛頭触れることなく、書名どおりの設定で、いきなり“図書館学とは何ぞや”の解説からはじまっている。

まず図書館学の研究対象を挙げて

図書館学所研究的对象，就是図書館事業及其各個組成要素。図書館是客觀存在着的一種事業，是人類社会生活現象之一。這種現象，這種事業，深刻地影響到我們的生活——學習生活，文化生活，科学研究生活。既然如此，難道不應該弄明白它的性質，它的發展規律，它的各個組成要素及其規律嗎？（選集本P132）

と呼びかけている。すなわち図書館は人類の社会現象のひとつであって、われわれの社会生活と深いかわりあいをもっている。そこでそれぞれの組成要素と規律を対象に、明白にしなければならない。

人類社会の中にある図書館は、社会の発展に従って存在するものである。中国にあっては、図書館の存在は、すでに千年以上を経ている。

よってまた歴史学との関連も忘れてはならないという観点から

研究図書館在人類歷史的作用，研究它的發展過程，分析它的要素，掌握它們的規律，從而使它能更好地為人們生活服務是図書館学的第一個課題。（選集本P133）

と。このようにして、社会学のみならず歴史学との関係も深く、さらになお

図書館并不是一種買書借書業，而是對我們生活，我們文化有深刻影響的文化教育事業

呢？（前掲同）

と説いて、われわれの日常生活と深い関連を有する教育事業であることも認識する必要がある、と訴えている。

かような前提に立って、かれはさらにソ連百科全書の中の“図書館学”の項を引用して、その研究の帰結として、(1)図書館事業史、(2)図書館建設原理のふたつを挙げ、この要素こそ、図書館学のもっとも代表的な組成部分であるとみなしている。

続いて図書館事業には、5項の組成要素があるとして、(1)図書、(2)読者、(3)領導和幹部、(4)建設与設備、(5)工作方法を掲げ、この5者のうち、1項が欠けても、図書館の存在はあり得ない。そこで図書館学は、必ずこれらの諸要素を分別して研究を進めなければならないことを力説し、いわゆる5要素説を挙げて、各項を設けたゆえんを解説したのである。

ところがここで見掛けるように、かつて4要素説を主張した劉師が、ここでは5要素に展開しているが、その理由については、なんら述べていないが、その点、不思議でならない。

そこでわれわれは、その間のいきさつについて、次のように推察してみた。

(1)解放以後においては、図書館の振興は政府、国家の大事業としてうたったことに注目したい。

つまりこの著作が公表される前年に、あたかも周総理が“関干知識分子問題”の演説のなかで、研究機関や大学の図書費の増額、および図書館や博物館、公文書館の興隆を強調したり、全国古籍善本書総目の発行をうながしたことは、見落してはならない。

この意向に沿って、政府、関係機関から、諸法令が相ついで出され、78年にはときの華国鋒主席も“図書館の発展、科学研究と図書館網を組成すべし”と呼び掛けている。

従って図書館学の研究対象と範囲は、単に孤立した図書館に踏み留まらず、国家的な、さらには国際的な図書館事業へと転換しなければならなかったことに起因する。

(2)社会主義革命と、社会主義建設の新時代へと進入して、図書館事業も現代化へと路線の修

正をしなければならなくなっていて、例えば、このところ相ついで出た代表的な分類法をみても、“マルクス・レーニン主義、毛沢東著作”を先行しなければならなかった社会情勢のことが挙げられる。

それがため領導と幹部が分化したり、工作方法の中に、科学的な運営、業務が取り込まれるようになったのではなかろうか。

(3)劉師は欧米、ソ連はもとより、わが国の図書館学史に対しても深い関心を示すほか、その吸収に余念がなかった。とりわけアメリカ発行の代表的な著書、論文にはくまなく眼を通していたふしが読みとれる。そのひとつとして、前著『図書館学要旨』の前年に発表された、シカゴ大学の Pierce Butler 教授による“An introduction to library science”は、何年かのちのことになるだろうが、必見されたに違いない。

については本書は、その序論に続いて、図書館学を、科学的、社会学的、心理学的、歴史的、實際的諸問題に分けて、その関係を展開している。ところが前述したように技術的、実践的な面が強調された30年代前半において、Butlerはそのような面を捨象した立場で、*librarianship*の*philosophy*を論じているが、これこそ*library science*であると主張した最初であることは周知のとおりである。劉師は解放以前にすでに本書を読破して、意志の疎通するところがあつたに違いないと推察しても、あながちうがち過ぎではなかろう。

如上の視野に立って、かれの主張するところを概説してみたい。

図書館学は、やはりきわめて若い学問であるから、多くの問題はいまだ初歩的な結論にしか達していない。急ぎ追いつき、研究を進めて、正確な軌道に乗せねばならない。

図書館学の研究には、その研究対象をよく観察、調査、分析して、その中から共同の特点、規律を抽取して、ふたたび実践中において、この種の抽象的認識の正確性、信頼性を証明しなければならない。

多くの科学は、それが発展してゆくに当っては、すべてまず一段の描写経験、分析経験の時

期を経過して、しかるのち系統化して、理性の段階へと進んでゆくのである。図書館学は目下、まさしく主要なことは、経験を総結する段階に置かれているが、いますぐ深く、全面的に理論大系の完成を期待することはできない、と述べている。

さらに図書館学は、一門の独立した科学であることを承認せざるを得ないであろう。とはいっても、一門の孤立した科学であるといっているのではない。図書館学と多くの科学とは、いずれも密接な関係にあって、教育学や心理学、歴史学、文学史、科学技術史等々と、深刻な関係がある。

あるいくつかの専門の題目の研究中にあっては、はなはだしきは自然科学とも連係がある。

例えば、図書の保護問題を研究するにあいには、物理学や化学、昆虫学方面の知識をも運用しなければならないであろう。加えてその他のさまざまな科学の成果を利用することも必須である。かかる説明をした前後を締めくくって

総起来説、図書館学就是関干図書館的科学。

也就是研究図書館事業性質和規律及其各個組成要素的性質和規律的科学。(前掲P138)

と、結語を披瀝したにもかかわらず、重ねてその主要な組成部分として、その巻頭に“図書館事業の研究に關すること——図書館事業史、図書館建築原理、各種類型図書館の専門研究等”という、新たな1要素を加算している。ところが、われわれはここで疑問視されてならないのは、上記のような新要素が突如として加えられているにかかわらず、なんら解説が施されていない点であるが、いまここではその推論については差し控えたい。

さてこのあと劉師は、以上が“図書館学とは何ぞやという認識である”と結んで、“錯誤があるところは指教を仰ぎたい”との筆致で終わっている。

ところですでに述べてきた転換期に際して、模索している館界に、確乎たる新路線が敷かれたことで、快哉が叫ばれ、期待が満たされたのはいうまでもなかった。ところが一方では、が然問題の俎上<sup>21)</sup>に乗せられ、討論、批判の対

象になったのは、要素の設定数ではなくして、むしろ“図書館事業の階級性を無視し、まったく抹消していて、肝心の任務方針、指導原理が示されていない”という指摘であった。

すなわちときまさに時宜を得てその翌年、中央人民政府文化部で主催して行った図書館幹部養成機関である北京文化学院図書館研究班20名によって分担執筆した『社会主義図書館学概論(初稿)』(その日本語版については、本稿冒頭に掲載)が発表された。59年元旦を卜<sup>21)</sup>してのことであつた。ついでには直ちに各地から寄せられた意見を踏まえて、同志による討論進行の結果を集大成して、翌年には修訂版を発行して、世に問うたのであつた。

その経緯については巻頭に掲げた出版説明でも鮮明にされていて、そのうちには缺点や錯誤は免れ難いので、図書館界および読者からは貴重な意見を提供されて、さらに修復したいむねをうたっている。果せるかな、将来とも基本的理論大系樹立のため、真剣な宝庫になったことは、いうまでもない。

批判の槍玉にあげたのは、開卷第一の緒論に掲げた次の意見である。<sup>21)</sup>

文化有階級性、図書館也有階級性。它們不為剝削階級服務，就為被剝削階級服務，二者必居其一。封建社会的図書館(藏書樓)，為封建統治階級服務，半殖民地半封建社会的図書館，為地主，資產階級服務。

いわば過去の図書館は、支配階級、ブルジョワ階級のために奉仕したが、社会主義社会の図書館は、政治と社会、経済から遊離することなく、あくまでもプロレタリア階級に服務するのが基本路線である。にもかかわらず杜・劉両先生は

所津津樂道什么“不分階級”，“五要素”，“三要素”等等(恕我們不一一徵引)，無非是用来模糊人們的眼睛，抹煞図書館事業的階級性。何以見得?(P2)

と完膚なきまでに攻撃したうえで、よって研究対象とすべは

應該是整個図書館事業如何貫徹基本方針，基本任務以及図書館事業的建設原則，各項業務工作等。(P2)

であって、またその研究方法を示せば

應該是实事求是，理論与实践統一，要從群眾中來，到群眾中去，即集中全國圖書館工作的經驗，上昇為理論，反過來又指導實踐，把圖書館學作為推動圖書館事業前進的武器。<sup>(P.2)</sup>であると、その方法論を掲げて、所詮われわれが研究しなければならない図書館学は、大衆に奉仕するための理論と実践を統一した、社会科学の範疇に属する一科学であることを理解すべきであると警告している。

このような批判に対するその是非については、先年来日した北京図書館の丁志剛副館長の評価にもみられるように、それなりの過渡的価値があったようであるが、他方またその後の論議を呼び起す道程になったことでも意義深いといっておこう。

つまりその2年後には、北京大学と武漢大学共編の『図書館学引論』が、さらに文化革命動乱期の困難時代を経ると、81年にはここに権威ある『図書館学基礎』が正式に出版されたが、このような紆余曲折の歴史を回顧するとき、最高峰を極めるため、懸命に取り組んできた大御所の努力は虚しくはなかったと、われわれは賛辞を贈るばかりである。

われわれは最近、黄宗忠編の682ページにも及ぶ『図書館学導論』<sup>(1986)</sup>を、このほどわが国の図書館情報大学へ留学してきた、四川大学の李常慶先生に託されて、編者からの贈呈を受けた。ついては、その書簡によると、黄先生は目下さらに『図書館学導論研究資料匯編』を執筆中のようなのである。思えば半世紀にわたる討論の道のりから考えると、いまや中国における斯界の盛況ぶりを拝察して感慨深いものがある。

#### 4. 目録と分類の理論と実際

このことについて述べるに当たっても、前項同様、時代的環境が著しく相違しているため、やはり前期と後期に振り分けながら考察するのが妥当であろう。

**目録**——最新の学術を習得、経験して帰国した劉師がまず感得したことは、伝統的な蔵書様式管理方法では、近代図書館の運営には対応し

きれないことであつた。編目法についても、古代からの群書を簿録し、“弁章學術，考鏡源流”をむねとする伝統的工作法では、細分化された学問、急増している出版界には、もはや適用しないので、その点を呼び掛けたのであつた。

自ら主編する『図書館学季刊』<sup>(2巻2期)</sup>に『図書目録略説』を発表したのが<sup>23)</sup>28年である。すなわち J. D. Brown や C. A. Cutter の所説を引用しつつ、旧来の版本学、校勘学、ないしは書誌学にかかわる *Catalogue* (書目)、*Bibliography* (書志)、*Literary history* (著述史) との区別を明確にしなければならない腹組みを、わずか12ページに縮刷して、警鐘を鳴らしたのであつた。

このような頂門の一針を打ち込んだうえで、その翌年、すでに述べたように『中文図書編目條例草案』を発表して、統一目録規則の必要性をうながした。巻頭を飾る35ページに及ぶもので、伝統的技法では到底考えられなかった標目 (heading) + 記述 (description) を主体とするカード式標準目録法を提唱した。これこそ、中国最初の *Chinese Cataloging Rules* の出現であつた。

この規則は、かれ自ら金陵大学における編目作業の実践を経て作成した予備版であつて、まず草案を発表し、国内各館の意見を聴取したうえで、次の年、単行本として出版した。自館はもとより、中央では北京図書館、地方では河南省図書館等でも、いち早く採用された実状であつた。

しかしながらひとたび中国解放の幕が上ると、全土を挙げて思想的基盤の改造を計らねばならなかった。かくしてこのあと触れるように、かれ自身にとっても、このみち先進国ソ連の図書館像を厳しく学習し始めた。そこで目録法の分野においても、劉法を採用している図書館も多いため、時代に即応した再生への修復を、にわかに敢行する必要に迫られた。この瀬戸際に立<sup>24)</sup>った劉師は、『図書館目録』を発表して、世の期待に応えた。着眼したのは(1)図書館目録の意義、種類と編制原則、(2)図書著録問題、(3)目録組織問題、編目簡化問題についてであつて、現代化時代への見直しを計ったのが真相である。

それと同時に他方では、大規模化しつつある

図書館からの要請に呼応して、相ついでいくつかの意見を発表している。その代表作としては、『關於大型図書館的图书編目工作組織』（『図書館通訊』1957 1期）、『關於处理多語文图书的意见』（同上3期）、『図書館目録大系問題的探討』（『図書館』1961 2期）等である。

前期同様いずれも基本記入 (main entry) 方式であるが、ちなみに新旧比較した1例を挙げると

前期 (『図書館季刊』 1929 3卷4期 P.499)	文318.2	帯	經堂詩話	三十卷首一卷
	1901 2336	部一 部二	清王士禛(原題漁洋山人)撰 清同治十二年(癸酉), 廣州藏修堂, 重刻本 十二冊	
後期 (『図書館工作』 1956 5号 P.20)	索書号	卡	尔·馬克思(馬克思生平履歷及學說簡述)	
	圖書分類号		列宁著 唯真訳校 1951年 莫斯科外国文書籍出版局 鉛印本 48頁(馬列主義双書) 本書根據俄文單行本(蘇聯國立政治書籍 出版局1950年莫斯科版)訳出 完全分類号(或者写在卡版背面)	

追って、劉師の晩年に興起してきた目録の機械化、電算化についての対応、展望に関しては、第7項にゆずりたい。

**分類**——すでに解説したように、20世紀に入ると、中国の図書館内には、中外の図書が玉石混交するがごとき観を呈してきて、その処理のため喧喧囂囂のありさまであった。かれ自身も逝去後に発表された遺稿のなかでも、当時直面した難問題として、(1)いかにして新旧の図書に対処するか、(2)いかにして中外の図書に対処するか——という局面にさらされていたことを吐露しているありさまであった。<sup>25)</sup>

かねてアメリカより来華した Wood 女史は、1930年には文華公書林で、1907年にはボストン博士が亜州文会図書館で、それぞれ DC を採用するようになると、刺激を受けた館界では、やにわに関心が高まってきた。そのうえ1909年には『中国雕版源流考』の著者として名のある孫毓修<sup>26)</sup>が、『東方雑誌』に“図書館”のタイトルでDCの紹介をしたことは、いちずに普及への意欲をかり立てた。

そのようなおりから、23年にはアメリカ帰りの楊昭愷<sup>27)</sup>が、『図書館学』（2巻 上海商務印書館）を出版した。ときにその下巻(P.335—382)で、アメリカ産としてはデューイの DC をはじめ、カッター

の EC、および LC を、イギリス産としてはブラウンの SC の大綱を、翻訳、紹介して、それぞれの優劣を掘り起して論評した。

このような記事がきっかけとなって、数年あまりの間に、劉師の母校である金陵大学の出身で東南大学在勤中の朱家治、台湾へ渡った国立清華大学の蔣復璁<sup>28)</sup>や、山東省立図書館の李玉麟らが相ついで、それぞれの観点から DC の紹介を行った。一方では26年には、ニューヨーク州立図書館学校を卒業して、朱家治と同じく東南大学に赴任している洪有豊主任は、対照するごとくカッターの EC を克明に紹介した。

ときまさに分類法の採用をめぐる、ひとしきり揺れ動き、暗中模索したありさまが、手に取るごとく見てとれる。ほどなくして、とりわけ関心の深かったDCの中国式アレンジ版が、相ついで続出することになったことは、ときのいきおいであった。その先鋒ともいべきは沈祖栄、胡慶生共編の『仿杜威書目十類法』である。

18年に文華公書林から出版された。同様の趣旨で、25年には杜定友による分類法が発刊されたのを皮切りに、わずか4年間に洪有豊、陳天鴻、査修、陳子彝<sup>29)</sup>、王雲五らによって、“削足適履”の宿命を抱えながら、“我田引水”法<sup>27)</sup>が、競って開花したありさまであった。

群雄割拠の観を呈している矢先、隠忍黙するに耐えず、29年のこと、ここにいたって『中国圖書分類法』を、南京大学図書館から印行して、世の注目を浴びたのが劉国鈞であった。いわゆる劉法は、自ら勤務する金陵大学図書館での実践を通して成就した珠玉の力作であった。一気に国立北京図書館や故宫博物院といった、中国全土に指導性をもっている大型図書館をはじめ、南開大学や輔仁大学まで採用されたが、すこぶる反応があったことは、いうまでもない。

続いて数年あまりの間に、皮高品の『中国圖書十進分類法』をはじめ、7種類ていどの著名な分類法が発行され、それぞれ各館で採用されているが、劉師自身の評によると、劉法以外には杜定友と皮高品のそれが重用されたことを認めているし、また白国応はこの3法のほか、王雲五

法も盛んに通行したと評していることでも、時勢のありさまが知られる。

についてはここで、劉師が新分類法を編集せんとした動機についても検討しなければならない。

五四運動の勃発は、やがて反軍閥、反帝国主義の政治的国民運動へと発展していった、新民主主義革命の時代を迎えると、中国は政治のみならず、社会、経済、文化、科学等、すべての分野にわたって空前の変革を誘発した。図書館内においても、旧学と新学の確執に悩み、ひいては保守と革命、資産階級と無産階級の闘争という事態をみるようになった。これらの矛盾を解決するため、洋行帰りの図書館人たちを筆頭に、主として DC を下敷きにした新分類法が、次つぎに誕生した経緯については、さきにも述べたとおりである。

かくしてかれは、雨後の竹の子のごとき分類法を評価して、5つの範疇に分けているが、改訂版の導言にも自序しているように、長短得失を勘案しながら、新旧書統一の根本原則に立って、編集することを試みたのであった。

つまり四庫分類法はすでに適用することは困難であり、新旧併用制では牽強附会の技法を免れることはできない。さればとて欧米法でも適合不可とみて、わが分類法こそは、十進の檻<sup>30)</sup>に閉じ込めることなく、融通性と適応性を具備することが必要であると確信したのである。

すなわち劉法では、まず9大部に加えて総部を設け、さらに各部を細分するばあいは、10類に不足するか、超過するのが普通である。よって細分の際は4～5、8～9区分といった流用性を取ったのである。アラビア数字による記号の配分も、実践的体験から生れたものであるが、つまるところ、基本的には機械的な10進性を放棄したものであるといってもよい。この趣旨から、本表にも相互参照を採用して、数目を交替できるように企図した。

さらに使用法と注釈を設け、巻末には、共通細目や西洋時代表に加えて、日本時代表、および中国の時代表のほか、中国の地理区分には省区表、および縣市詳表を附するなど、8つの助記表 (Auxiliary tables) を附して、しっくりと中

国の風土に噛み合うようにした。

しかも設立されている類目が多いため、容納し得る範囲が広いことも、好評をもって迎えられたゆえんである、とうなずかれる。

なお、かれの編集態度をみて、いまさらに感佩されるのは、かねてからアメリカの知識を導入するほか、当時における日本の図書館情勢にも、さすがに強い関心をもっておられて、その優点を採る意図があったことが汲みとれる点である。

かれがかつて顧実の『図書館指南』(上海医学書局1920)を評するなかで、顧氏が東京帝国図書館の運営法を挙げていることに説き及んで、同館の『和漢図書編纂概則』は、中国のカード式目録の編成には大いに参考になると、日本の現状を評価している点に注目される。

続いて、アメリカ留学より帰国した戴志騫の北京師範大学における講演稿の一部、すなわち

日本之近代図書館知識実由美国而来、推本窮源、則図書館界之漸転其眼光於美国亦固其所。(P347)

を引用して、日本の図書館学は、アメリカにその窮源がある旨を述べた一条がみられるが、関連してさらになお、次の主張も見落せない。

図書館学始則規模東瀛、継則進而取法於日本所追逐之美国。今則本新図書館之原理次解決中国特有問題之趨勢已皎然可見。(P348)

この記事は、帰国の翌年6月に発表されたものであるが、この中でもうかがわれるごとく、劉師は、日本の図書館理論も、その淵藪<sup>31)</sup>はアメリカにある点を認めつつ、しかも一方では、漢字文化圏に属す日本の図書館事業に、深い関心をもって、その理解と吸収に心掛けておられたありさまが、如実にみてとれる。

については苦心の労作であるこの分類法こそは、中国図書館の実状を基礎にして、アメリカ、ひいては日本の新図書館学理論と技法を進取したうえで、中国特有の問題を解決することを意図したものであると、太鼓判を押していると察してもよからうと思われる。

しかしながらこの当時にあつては、金科玉条の典範として歓迎された分類法も、もとより半

殖民地制度、半封建社会時代の産物であるため、解放後には、社会主義社会建設に伴う、理論闘争の俎上<sup>31)</sup>に乗せられ、批判の対象になったのも、勢いの赴くところであった。

すなわち特定の統治階級を擁護するために作られたもので、類目の設定や位置のうえからみても、誤謬<sup>32)</sup>が多いとも評された。例えば附表の分国表には、中国の領土であるべき“台湾”、“香港”、“澳門”が、アジア州の分国としての子目に入れられているなど、これは帝国主義者、国民党の統治者に服務するものであると指弾されてきた。あるいは分類大系は唯心主義的であり、かつ階級性を無視していて、プロレタリア階級に奉仕するものではないと、非難される場面もあった。

ところがこの分類法も当然のことながら、社会主義時代には通行できないことを、身をもって熟知していたかれは、北京大学へ転任して、北京図書館へも出向しているのを機会に、同館の編目部工作者の協力を得て、28年ぶりに、北京図書館から修訂版を印行することができたのである。

とはいえ急拠修復が成った所産ではなくして、それよりさき同館へ出向するようになった翌年に発行したばかりの、すでに述べた『図書怎樣分類』や、『怎樣編制分類目録』を踏まえて、4年間にわたる編制作業の結果、誕生した分類法であることを念頭に置かねばならない。

つまるところ基本大類の前面に、新たにマルクス・レーニン主義の大類を設け、総部を最後にまわして、社会主義思想大系に適応せしむることを基調とした<sup>32)</sup>。

56年に文化部社会文化事業管理局で組織された『中小型図書館図書分類表草案』編集委員会には、北京在住の権威者として招かれ、翌年に公刊することができた。するとまたこの草案の宣伝、普及、教育の大任を負荷されて、59年の『図書館工作』(1期)誌上から、“図書分類浅説”を連載して解説を始め、津津浦浦からの意見を採集し、対応を計ったが、ここにもかれの学問に対する姿勢の堅実さがうかがわれる。

他の面ではまたこの年から中央文化部の指導で、

北京図書館を舞台に、全国的な規模によって、いわば大型の標準分類法を志向した『中国図書館図書分類法』の編集にも、その責任者として参加している。文化革命のためひとときさたやみとなっていたが、国家文物管理局と北京図書館が中心になって、36単位から500人に近い専門家を動員して、100余回の審議を経て、正式に完了したのが57年であった。この大事業に対するかれの功績も見逃せない。

欧米を通しての分類理論に関する研究も、生涯かけてやむことはなかったが、この関係については7項にゆずって、ここではさらにその他の関係論稿を羅列するに留めたい。

すなわち史永元との共著になる『我国図書分類法發展的情况』や、『分類標題和目録』、『分類法与標題法在检索工作中的作用』のほか、逝去の翌年に高弟たちの尽力で出された遺稿『図書分類法的發展』、『現在中国図書館内図書分類法的情况篇述』などがみられることのみを紹介しておく。

## 5. ソ連図書館学の学習

劉師50歳からの約10年間における業績を通覧して、瞭然と学びとれることは、この時期といえ、かれ自身にとっては、西北師範学院で世紀の解放を迎え、翌々年に北京大学へ赴任した当初であり、世はまさに社会主義社会建設のため、槌音高く前進をはじめたばかりのときである。いわば祖国の飛躍的な復興に乗じて、希望と情熱に燃えていた時代であるといってもよからう。さればこそ、いわゆるベストセラーズになった『可愛的中国書』や『中国書的故事』、『中国書史簡編』をはじめ、きわめて多くの業績が公表されていることは、特筆に値する。

なかでもさらに目を引くのは、ソ連に関する労作も際立っていて、翻訳のみでも10篇が数えられる。

そこでこのような趨勢をみるにいたった背景から考えてみなければならない。というのは解放されるや12月、直ちに毛主席はモスクワを訪問して、スターリンとの会談を行い、3ヵ月後に中ソ友好同盟援助条約が締結された。ほどん



く中国の図書館界においても、党と政府の政策に従って、先進国ソ連と友好を深め、ソ連の図書館事業を学習すべしという基本方針を樹立したのであった。

つまりソ連に学んで、“図書館では徹底的に帝国主義を一掃し、封建的資産階級の毒素を排除し、必ずすべからくマルクス・レーニン主義思想を宣伝し、労働人民をして各種の文化的、科学的知識を獲得できる陣地たらしめよ”<sup>34)</sup>という機運の高まりが生じてきた。

偉大なる革命の導師レーニンの“図書館は、図書をばすべからく迅速、広範に群衆に向けて流通し、図書財宝を人民に接近せしめよ”という指導をむねとし、旧来の蔵書楼的な作風を改変して、読者の閲覧を指導し、広大な群衆に対して、図書の活用を努めることに急であった。

ソ連における全国的図書館網の先進的経験を学習して、工会図書館、農村図書館を始め、科学図書館にいたるまで、図書館網の敷設が開始された。

このような情勢を脳裏に描きながら、われわれの手元にある月刊『図書館工作』を、3年間にわたって繙<sup>ひ</sup>くと、新たに生れ変わった図書館にとっても、迫真の様子が浮き彫りにされる。かたわらまた、ソ連の紹介記事、翻訳ものが誌面を賑わしている傾向も、際立って読みとれる。

かれが北京大学へ着任し、北京図書館へ出向するようになって間もなく、55年にはかれらの協力で、広く一般機関誌を目指して、前述の『図書館工作』誌を、学術専門誌を目標に『図書館通訊』をそれぞれ創刊したが、その執筆に当っては陣頭指揮をしなければならない立場にあった。

ときあたかも、さきにも触れたように、短期間内にロシア語を自学自習したのも、このみちの先輩国ソ連の図書館事業を、貪欲に、既存の中国図書館像再生への活力にするため、国是に沿って、意欲を燃やしたからにほかならない、といってもよからう。

『通訊』誌や『文物参考資料』誌にも、各号といってもよいほど、かれの筆になるソ連ものが掲載されているが、国家的な政策のもと、広

大な人民大衆を前に流通を果してきた役割には、計り知れないものがみられる。

代表的な翻訳のタイトルを列举してみると、まず1953年には

関于大衆図書館読者目録的組織

(蘇聯)農村図書館工作人員兩個月訓練班図書館事業課程

教学大綱

(蘇聯)区図書館工作人員一個月進修班図書館事業教学计划

与教学大綱

56年には

莫斯科大学図書館的目録大系

57年には

図書館分類目録編制法

喀山大学図書館的書目工作

蘇聯図書館目録大系

字順目録編制法

59年には

蘇聯図書館事業四十年(論文集)

俄羅斯聯邦文化部通過蘇聯新圖書分類法的基本序列

等が挙げられるが、これまた基本的には、自身の意識改造を目途にした研学の果実であったとも、みてとれる。

それはそのまま、劉師の論著にも、随所にソ連の労作を引用しているむきも多いが、しかし単なる受け売りにとどまらず、存分に反芻<sup>さう</sup>し、咀嚼<sup>くわく</sup>したうえでのものであることは、いうまでもない。なんといってもその前期は半封建、半殖民地時代に育ち、20余年間に及んで、もろに欧米の気風になじんできて、その心髄を受容し、自らの理論形成に努めてきたかれである。

こうしてみると、いまこそ社会主義図書館建設の使命に直面したこともあって、ソ連から学び取ることに獅子奮迅のありさまであったことが、如実にうかがわれる。

このようなわけで、この期におけるソ連図書館学理論の影響はきわめて強烈で、黄宗忠部長も、中国における基礎理論を追求するなかで

在蘇聯図書館学理論影響下、旧的理論体系受到冲撃、一個所的理論体系的胚已出現。

と、その影響と衝撃のすさまじかったことを認<sup>35)</sup>めている。

ひとまずこの項を結ぶに際して附言しておかなければならないのは、あながち無批判、無目的、ソ連一辺到に容認する気風ではなかった点である。ついてはここでふたたび江風の言を参<sup>36)</sup>酌しながら、その趣旨を顧みたいと思う。

すなわち党と政府が掲げた“学習蘇聯先進經驗必須与中国實際相結合”は、あくまで一貫した基本的指導精神であった。よって理論体系においても、改造を迫られている新しい図書分類法や、目録構成と目録政策や、閲覧方式といった管理、運用面にいたるまで、既成の慣行を全面的にかなぐり捨てて、専らソ連の作法を踏襲しようともくろんだのではなかった。

例えば中央文化部の指導により、北大や武大の専門家で編成した進修班が、よりより検討してきた省、市図書館の目録制度問題においても、いちずにソ連方式による分類目録を主とするものでなく、中国伝統の書名目録を採用することに意志統一がなされたのであった。また標準目録規則について審議された際も、ソ連方式の著者主記入(*Author main entry*)に準拠することなく、古来から伝承されてきた書名主記入(*Title main entry*)方式を譲らなかったのも、その基本方針を遵守したためであった。

なんといっても党と政府の中央部においても、全国的な規模をもって指導方針を公布している条々には、囑目される。55年には、中央文化部からは“關於加強和改進公共図書館工作的指示”を、中華全国総工会からは“關於工会図書館工作的規定”を發布して、公共図書館や工会図書館改進の根本精神を鮮明にした。翌年には教育部より高等教育機関に対して“中華人民共和國高等学校図書館試行條例”<sup>(草案)</sup>を發布して、当面の目標を指示したものである。

したがってかれ自身も、中国伝統の管理精神は失わず、無批判にソ連方式に傾倒することなく、また無目的に西欧のそれを導入する態度は避けて、上記の根本精神を発揚するため、やがて逢着した林彪<sup>37)</sup>の“四人組”の残酷な迫害を受けながらも、社会主義制度の優越性を堅く信じて、祖国の現代化を急務としていた心情を忘れてはならないであろう。

## 6. 中国書籍史の研鑽

解放後の翌々年に北京大学へ赴任して、図書館目録や西方図書分類法のほか、中国書史を講ずるようになった劉教授は、とりわけ書籍史の

研究に重点を置いて、内外の資料を駆使しての勉強、著述活動が始まっていった。

こういったことがきっかけになって、その翌年、兼ねて北京図書館へも出向して、同館の職員や一般民衆との対話が生れてきた因縁によって、その名のとおり、愛国主義双書の一環として『可愛的中国書』<sup>(建業書局)</sup>の小冊子を出版した。

これは中国人民大衆に“愛書のころ”を呼びかけた本であるが、以下に掲げた書籍史に関するいずれの著作にも、やがては祖国愛につながるこの思慕が秘められている点に気付くのである。

つまり古代の書きものから現代の図書までには、3千数百年の、尊い歳輪が刻まれている。1片の竹簡、木札、1冊の図書が生み出されるには、歴代の労働人民たちが、その材料、書写、造紙、印刷、装訂、ないしは流通、伝播<sup>38)</sup>等にいたるまで、創造性の才能を発揮し、かぎりない知恵と経験を積んだ、貴重な財宝である。こうした筋書きを充分理解されるよう、心から希望したいという願いを、その本の対象とする読者に促していることも、特記しなければならない。

さてその翌年には、前項でも述べたように、ソ連図書館学の研鑽に傾倒され始めた年であるが、その過程で、ナザロフ(Nazarov, A. I.)の『ソ連出版事業簡史』や、コンスタンチーノフ(Constantinov)の『歴史唯物主義』、ソ連大百科全書選訳『出版事業・書籍・雑誌・書誌学・書誌学雑誌』を閲読して、いたく感動されたようである。社会主義社会人としての図書史に対する心構えは、かくあるべしという自信と、勇気を得た劉師は、この転換期に、模索している若き青年や学徒を対象に、平易をむねとした解説書『中国書的故事』を出版した。北京青年出版社から16,000部が出されたのである。この著作の反響に対する一例を、かれ自身の言辭<sup>(再版本序文)</sup>からうかがってみれば

從這書的銷情況和各地讀者對牠的意見看來，牠還是能够在一定程度上滿足讀者們某些需要的。

というほど好評嘖嘖<sup>39)</sup>のありさまで、果たして

8年後、歴史知識小双書の一環として17,000部が再版された。

よってこの書を執筆するにいたった動機を、初版本の自序からながめてみると、“中国の図書は、きわめて光輝ある悠久の歴史をもっている。書籍史の材料はひじょうに豊富であるにかかわらず、この方面に関する著作は、かえってそのかずは寥寥<sup>ひまひま</sup>たるありさまである。そのうえわずかにある葉德輝<sup>ハツトクイ</sup>の『書林清話』や、孫毓修<sup>ソンヨクシウ</sup>の『中国雕版源流考』等の著作は、いずれも顕著な欠点がみられる”という趣旨の前おきをしたうえで、次のように論評している。

まず

他們只是搜集了，堆積了許多材料而没有予以科学的分析和系統的闡述，只能說是史料集而不能說是發展史。（自序 R7）

と、これでは發展史とはいえないと指摘し、

他們只注意到書籍的形式外表，只注意到書籍的生產技術和芸術，而忽略了書籍在社会發展過程中所起的作用，從而無視了書籍發展史中最重要的一面。（同上）

このようにして、もっとも重要な社会との関係が無視している点を挙げ、さらに加えて、

他們都只着眼于印刷術發明後的書籍，因而使人对図書の發展過程缺乏整個的認識。這不能不說是一件憾事。（同上）

とも評している。このように葉・孫両氏の著作は、印刷術發明以前において、書きものの生産に携わってきた労働人民の辛酸な功績を認識していないと、齒に衣着せぬ評価を下して、いかにも惜しまれてならないさまが汲みとれる。

さらに本書発刊のねらいをいま再び振り返てみると、過去から現代までの、作家自身はもとより、背後には、艱難辛苦してその製作に挑んできた労働者が秘められているのである。よってこの心血を注いだ貴重な文化遺産を対象にする姿勢を、描き出そうとしたのであった。

ついてはこの尊い歴史を叙述するに当っては、単に物質的、物理的な面ばかりに着眼するだけでなく、さらに文学、言語はもとより、政治、図書貿易、芸術的技法、文化生活等に及ぶまで、幅広く関連していることをも考慮して、その歴

程を、簡潔をむねとして、科学的、系統的にとらえようとした意中を表明している。

この心構えは、かれ50歳代からの図書館学理論一般の奥義でもあった。

やがてこの本は発刊以来25年間に、6回にわたる改訂、増刷が繰り返されてきたのであるが、その間、時代の前進は急であって、晩年の著者にとってみれば、いま一度、修訂する必要ありとの感懷から、ここにその大命を受けたのが、先生のあとを継いで“中国図書史”の講義を担当している鄭如斯副教授である。

そこで鄭先生は、中国全土に及んで繰り広げられている一大発掘事業が齎した成果、例えば敦煌、武威、馬王堆<sup>マウダイ</sup>、銀雀山、睡虎地などから、次つぎに陽の目をみている財宝を、書誌学的視点から検索しながら、さらに肉付けし、裏付けして、装いも新たに修訂版を完成したのは、劉師永眠の前年であった。より生なましい考古学上の資料や挿絵も加わった清楚な冊子である。

幸いにも、これまた訪中のおりのゆかりもあって、先生の署名いりて、松見あてにすぐさま贈呈をたまわった。拝見すれば初版以来、いかに大国とはいえ106,500部が発行されている実状を知って、まず驚かされた。ついては、この人気を博した『中国書的故事』は、発刊、改訂ごとに3たびにわたって贈与されたその厚情には、ひたすら感謝するよりほかない。

思えば過去20数年間、劉師はじめ、北大教授陣からの書簡でも望んでおられる、友好のささやかな懸橋になればと思い立った松見は、日中にわたる友情のとりなしで、『中国書物語』と銘打った日本訳版を発行（東京 創林社）することができた。ところが原著者のひとり劉師のもとへ贈呈し終えたのは、無念にも逝去の3年後に



鄭 如斯

1954年、北京大学卒業。  
講師をへて、図書館学部副  
教授。北京首都図書館業余  
大学講師兼任。  
中国図書館学会学術委員。

なってしまった。

しかしながら幸いにして、いまひとりの共著者である鄭女史から、この日本語版の料紙、印刷、装訂技術に対しても過分の讃辞を寄せられるとともに、しかも“劉老師の在天の英霊は、中日両国の文化に携わる先生がたの貢献ぶりに対しても、敬意と謝意を表されていることであろう”という礼状(1983年8月1日付)をたまわった。

あえてここで私事にわたることが許されるならば、近くは読売新聞、サンデー毎日、週刊読書人、図書新聞、図書館界等の書評でも高く評価を得たこともあって、原著者から寄稿をたまわった“中国の図書史に関して興味をもっておられる日本の読者に、少しでもお役に立てば”という日本語版用の序文の願望がかなえられたものと、自画自賛できる著作であると、大方に推賞したい。

加えて次の代表作として、58年に北京の高等教育出版社から発行された『中国書史簡編』を挙げなければならない。

本書は劉師が、北京大学図書館学部一年生に対して行ってきた“中国図書史”の講義用ノートを3回改訂して、周囲の勧めと要請があるため出版したものである。執筆の意図は前著の場合と変りないが、対象の主眼が専門の学徒であるため、叙述方式はきわめて格調が高くて、採取している資料も多く、人名、書名、件名がとても豊富であるところから、さながら学徒に向けた小百科事典の様相さえ感ぜられる。

巻頭には宝貴な写真版28面が掲げられ、本文は全8章に時代区分をし、各章はまた時代ごとに節をもって区分して、各章末には専門的な注が附せられている。巻末には参照のため参考書目を附した160ページの冊子である。

この本が出版されるや、またまた贈呈された。そこで“終焉の記”で述べたような、ずいぶん多くの方がたの力添えを得て、日本版を出版し終えたのであった。しかもそのうえ訪中したのがきっかけで、品切れ中であつたが、17年ぶりにその増訂版を出すことができたいきさつがある。

次に、この分野の著書としては、かれは本書

出版の翌々年に『中国的印刷』を発行し、同年にまた再版して、続いて『中国古代書籍制度史話』を新聞『光明日報』に連載した。これを加筆して72年に単行本『中国古代書籍史話』の書名で、挿絵を入れて、中華書局香港分局から出版され、翌年改訂版を出している。

ついでには本書に続いて、19世紀のア片戦争以後の分野も執筆する計画をもちながらも、後述するようにLCのMARCに関する研鑽に急であつたため、見送られてしまったと伝わっている。

## 7. 欧米図書館事業の導入

劉師生涯の膨大な労作を管見するとき、さきにも触れたごとく、当初においては、主としてじかに培ってきたアメリカの先進的な図書館工作の技法を中国へ導入して、蔵書楼的な体質から、近代図書館への再生を計ろうとする、若き氣概がにじみ出た著作が、きわめて目立っている。

解放されるや、約数年あまりにわたる間は、ときの党、政府の指導方針に沿って、社会主義図書館建設のため、ソ連の図書館書を学習することに傾倒していた経緯については、すでに述べたとおりである。

ところが66年5月、中国全土を震撼させた文化大革命が始まるや、図書館界も断崖の瀬戸際に立ったことは、いうまでもない。ときに拝領した書簡の中で、体調の不例を訴えられていた劉師も、一步外に出れば、林彪、<sup>38)</sup>“四人組”の極左路線の迫害に遇い、図書館学部も募集停止の憂き目に遭遇し、張春橋にいたっては、“図書館は幾百万冊所蔵しようとも、マルクス・レーニン主義と、毛沢東の著作だけで有用”と決めつけ、他は古籍や貴重本とて、すべて毒草であるとけなして封鎖してしまった。また焼却を叫んで、甚だしきは焚書を断行したのである。

かねてその惨事の世相については祖述したこともあるが、あまつさえ学術上の功労者に対しても、“反動學術權威”のレッテルを張り、多くの幹部には“走資派”(資本主義者)、“叛徒”(裏切り者)、“特務”(陰謀活動をするスパイ)の烙印を押して、長期にわたって下放させ、妨害を加えたうえ、

死に迫りやることさえあった。毛沢東の大方針であった“外国のものを中国に役立てる”という心情に反対して、洋書、外国雑誌の購読を妨害するのみか、“洋奴哲学”，“崇洋媚外”とののしって、海外からの図書、雑誌の輸入を禁止してしま<sup>39)</sup>った。

しかしながら身を持するに謹厳であったかれは、窓外の雑音にとらわれることなく、刻苦勉励されていた。

おりしも欧米、加えて日本の図書館に及ぶまで機械化、情報処理技術、機械検索の開発、日進月歩の現状に瞞目して、黙視するに忍びなかったかれである。それこそ四面楚歌とも思える衝撃裡にあって、ひそかに、あらゆるルートを通じて些細な資料を入手して、身に迫る病苦と闘いながら閲読し、翻訳し、かたわら執筆に専念されていたと伝えられている。うけたまわるだに恐懼<sup>40)</sup>して襟を正さざるを得ない。

いち早く発表されたのが『“馬尔克”計画簡介——兼論図書館引進電子計算機問題<sup>40)</sup>』であり、『用電子計算機編制図書目録的幾個問題<sup>41)</sup>』であって、いずれも MARC 様式が初めて中国へお目見えしたときの産物である。これこそえも言われぬ、1字1字に精魂が込められた成果であるさまがしのばれてならない。長篇の作であるが、ここでは摘要を掲げて、われわれの参考にも供したい。

**馬尔克計画簡介——馬尔克はMARC (*Machine Readable Cataloging*) の音訳であって、日本式にいえば、機械可読目録**（中国訳では機器能読目録であるが、次下通例の日本式で表記したい）を紹介したもので、合わせて、中国への導入問題については、(1)~(9)章に区分しているが、実に蘊蓄を傾けた著作である。まず(1)の序言に続いて(2)では、MARC プランの歴史的背景と現下の組織について述べているが、LC (*Library of Congress*) ではこの計画を実施するに当って、詳細な調査研究と、周密な準備工作を行ったうえ、1963年に、商業データや技術問題を処理するまでに発展した。

LC では 10人の電算機専門家によるパイロット・プロジェクトチームを編成し、図書館工作

の自動化の可能性を追求してきて、やがて *King Report*<sup>42)</sup> を提言するまでになった。64年には *Informac Corp* を設けて、さらに一步を進めた研究を行ってきた経過を年次を追って解説している。かくして67年6月末をもって、MARC のテストプランは正式に結束して、ここに MARC data base を開発することができた。

(3) MARC システムを紹介するに際しては、4つのシステムに分けて解説した。

①入力<sup>43)</sup>の端末機には主要な4つの機能単位<sup>44)</sup>が<sup>45)</sup>あって、データの収集、予備工作、転写および処理の各段階について説明し、②次に、データの端末機としては、データ処理に当って、LC では磁気テープを開発し、データの管理を行ってきた。

③ MARC 検索の端末機としては、そのふたつの単位のうち、MARC 検索言語規格では、COBOL と FORTRAN がある。前者はコンピュータープログラム言語として、事務処理に適しており、後者は IBM 開発のコンピュータープログラム言語、科学技術計算処理に便利であることを解説し、次に、その検索処理について述べている。

④項では、大体において Leach が68年に出したレポートに基づいて、MARC 入力<sup>46)</sup>の端末機を3つの機能単位に分けて、MARC output sort 以下を、それぞれの区分に応じて論評した。

(4) MARC 記録方式としては、①どのような事項を入力するか、②これらの事項は、まさしくどのような形式を具有しなければならないか、という方式問題を考慮する必要がある。ついては LC では、AACR (*Angro-American Cataloging Rules*) に基づいた印刷目録が出されるようになった。

機械可読カタログには、必要な指示として、*Leader, record directory, tags, indicator, subfield code, delimiter, terminator* 等があることを説いて、記録内における各分野の説明を行っている。

続いて MARC 記録としての磁気テープについては、その毎条のレコードを4大区分して、アメリカの実状を解説したものである。

(5) 方式識別の項では、コロンビア大学の例を挙げ、かれらが研究してきた計算機を用いる

方法は、“自動方式識別法”ともいうべきもので、大いに人力を節約して、機械による目録法の進行を、加速度的に作業する方法であるが、関係資料が得られないので、詳細は知らないと言憾の意を表されている。

(6) *Character set* についてであるが、元来文字の種類はきわめて多く、わずかにローマ字はあるが、デンマーク語やスウェーデン語等の需要には困難である。

まず英文に訳したうえで入力しなければ、図書館の要求には応じ難い。LC では、IBM MT/ST 第5型を選択した。その標準の鍵盤は44字符があって、上下2ケースからなり、88個の独特の字符を生み出すことができる。ただし、図書はさまざまな英文以外の文字を包括しているので、88字だけでは遠く及ばない。そこでLC では、ふたつ重ねの記号を連合して、174個の独特の字符を使用するように設計した。

およそデンマーク語、スウェーデン語、オランダ語等は、すべてMT/ST Model Vを用いて、原文に照しながら入力できるようにしたが、いわば MARC にとっては、最大の貢献である。しかし、やはりギリシヤ語、アラビア語、および各種の東洋語のような、非ローマ字系統の文字では入力不可能である、ともいつている。でもこの記事は、75年代の現状である点を差し引かねばならないことは、もちろんである。

(7) RECON (*Remote Control System*) の解説である。LC では1901年にカード目録を開始しているが、その後何百万枚かを累積してきた雑多なカードを、一律に現行の MARC に変換しなければならないという、至難な問題に出合った。その間、テストプランに基づいてこの問題解決に努力した結果、ようやく72年にいくらか見通しができた報告が発表され、さらに研究が進められている実状を、詳細に説明している。

(8) MARC プランの発展と展望の項では、68年から出発して、その後マイクロフィルムや、フィルムストリップ等の類型まで範囲が拡大されていって、73年以降、フランス本やドイツ本をはじめ、その他の外国書までも及んできた。

やがて図書館ネットワークも *National Library and Information Service Network* へと進展して

いる。LC では、一方では ALA, BLA および CLA と共同で改修した前掲の AACR を、さらに電算機目録の要求に応えようとしたものである。

べつの一面ではまた、IFLA<sup>43)</sup>を中心に、MARC の基礎的な研究をしたうえで採用、修訂して、ISBD(M) や、ISBD(S)<sup>44)</sup> を、1979年に刊行したが、このように LC 活動の出発点としての MARC の貢献ぶりについて、啓蒙をうながしている。さらにイギリス、フランス、西独、カナダ、オーストリア、ニュージーランド等における磁気テープを利用した書目作業の現況についても解説している。

(9) 結束語として、MARC プランは、アメリカ図書館界における大規模な実験のうえでは、初歩的には成功を収めた。LC では常に研究し、実験を続けてきて、少なからず成功と失敗を繰り返した経験、あるいは教訓に関する報告や、専著を発表してきた。

かくして MARC プランの責任者であった Henriette D. Avram<sup>45)</sup> の報告を引用して、自動化には難問題も危険もはらんでいるが、やがて全面的に自動化し、現実化する日も、遠いことではないとの展望がうかがわれる。

顧みるにその後10年間における、これらの難問題に関する飛躍的な進展は、中国のばあいのみをみても、超高速度的といってもよからう。しかしながら、かれがこのレポートの最後を結んでいる警告を掲げて、われわれは自重の糧をとなしたい。

只有輸入的素材越多，電算機的威力才越大；決定事物用途的最初和最終的力量是人而不是電子計算機。（『選集』本 P.329）

現代化、近代化といえども、電算化、自動化という機器万能を指すのではない。最初と最後を決定するのは人間である、と。いみじくも半世紀あまりに及ぶ、中米図書館業務の体験からにじみ出た、次代に託する訓戒であると受けとめたい。

用電子計算機編制図書目録の幾個問題——いまここで劉師が、MARC の現状と未来像に対して研磨を積んできた過程で、解決を迫られる

問題点が興起してきた。しかも、おりから国内では党、政府の領導によって、電算機による編目工作の導入が計られ、それに伴う標準化組織の構築が促進されようとしているとき、その水先案内にと、最近2年間の研鑽による成果を、10ページ余に集大成して、一石を投じた勧告文であるともいえる。

うけたまわるところによると、内外の関係資料を駆使したとはいえ、技術的に未開発の現状であり、標準化された術語も不足しているうえ、しかも自身の病状がつのっている最中の執筆である点を察すれば、重なる障害を克服して、実に至難な条件のもとで成し遂げられたものであると、われわれひとしく、同情と感銘の念を禁じ得ない。

ついてはまずはじめに、中国における機読目録で問題視されるのは、入出力すべて、漢字に対する取り扱いであることを挙げている。この時点ではもとより約10年前のことであるが、おそらく意中には、漢字文化圏、とりわけ日本の現状をも踏まえての考慮もあって、“最近何年か、少なからず何人かのひとが、努力研究していて、同時に、初歩的な成績を取得しているので、久しからず完全に解決するであろう”と、近き将来への予測をしている。そのうえ関連して起ってくる *medium*, *byte*, *bit* のことや、*encoding*, *decoding* するに当って、目下“中国の図書館界は、やはりまだ標準化されていないので、急速に完成するときが待たれる。これは図書館工作の自動化にとっての、切迫した問題である”，とも訴えている。

次に、中国における *character set* には、必ず包括して考慮しなければならない問題点を指摘し、さらに機読目録の基本項目と、組織方式を決定すべきこと、および計算機自体が要求するところの種々のインストラクションを決定すべきであるとの提起もみられる。

なお MARC の磁気テープにかかわる *leader* を始め、*record directory*, *controlled or fixed field* および *variable field* の4大部分、さらには *tape mark* を始め、いくつかの術語を解説するなどして、急ぎ符号の標準化を促がす記述も

ある。

つまるところ、“解決すべき任務は複雑にして膨大である”が、“われわれは党中央の領導下にあって団結し、同心協力して、相互に支持しながら計画を立て、手続きを踏み、自信をもって一步一步進行して行けば、近き将来、必ずや中国は、世界先進国の水準に迫いつき、追いつくことができるであろう”との信念を吐露している。

そうしたうえで、“社会主義革命と社会主義建設事業のため、積極的に貢献しようではないか”と、病苦と闘いながら叱咤<sup>いた</sup>の激励されているが、このときの筆者の心中が思いはかられて、ひとしお、われわれの胸を打つものがある。

縷縷<sup>るる</sup>として論述してきた最後をしめくくって

我這裡所談的意見都是個人的初步設想，一定不免有遺漏和錯誤，懇切希望同志們的批評和指教。（『選集』本 P340）

と、謙虚そのものの気持ちで呼びかけられている。いかにも当時におけるこの道の研究者、ひいては当局者にとっても、まことに千金の重みがある具申であり、活力素であるというべきであろう。

果せるかな、あたかも翌年の9月には、“中国標準化協会”の名をもって ISO (*International Standards Organization*) に参加する運びとなり、教育部よりは高等教育機関に向けて“關於加強高等学校図書館資料工作的意見”が發布されるまでに進展していった。

さらにその翌年の4月には、“国際標準化組織文献工作標準化技術委員会第18届年会”に代表を派遣して、全国的規模で標準化活動が始まった。ついては年末12月には、まさしく“全国文献工作標準化技術委員会”が成立して、この会議で“中華人民共和國標準化管理條例”を審議したのであった。そのうえ翌年に、中央書記処においては、“<sup>省(市、自治区)</sup>図書館工作彙報提綱”が通過して、“<sup>省(市、自治区)</sup>図書館工作條例”が公布されるまでに進展していった。

ときまさに、奇しくも劉老師逝去の年に当るが、げに身命をなげうって難行苦行された遺志が、ここにおいて21世紀へ向けて輝やかしく開

46) 花したことを、遺弟たちは、劉老師の霊前に報告されているのではなかろうか、とさえ思えてならない。

追って劉師の他界後も、高弟たちの骨折りで、次つぎにその遺稿が整理され、発表されている。なかでも、中国図書館学会編集部のきもいりで、“10年間にわたる動乱期間中、劉先生は身心ともに迫害を受けながら、しかも孜孜として学問追求に励み、この歴史的な時代にもかかわらず、外国における図書館発展の動向に密接に注意を拂われていたが、ここにも先生の治学、治業の精神の一斑をみることができる”という“はしがき”に始まって、次の論文が発表された。

すなわち逝去の翌年に『1965年以来美欧図書館学論文簡介』というタイトルで、27ページに及ぶ、おそらくや難産であったと思われる珠玉の結晶が、めでたく陽の目をみたことのみを紹介して、本章の結びとしたい。

### 終焉の記

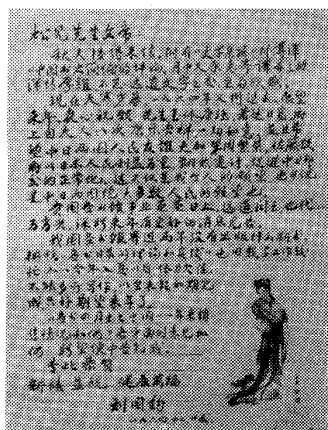
#### 1. 老師と松見との邂逅

劉先生の高名に接したのは、著書、論文を通じて、いわゆる戦時中であった。ところが戦後になって前述した高著『中国書史簡編』が発行されたおり、翻訳して出版したいこともあって、ときに訪日文化使節団が来日した際、旧知でもあったいまは亡き郭沫若団長に、翻訳権に関する書簡を託したところ、まもなく、友好のためにもぜひ成就されたいという承諾書とともに、直ちに重厚な日本版用の序文までたまわった。

ついではこの訳書は、かたがたの力添えて理想社から出版できたので、約束により劉師も含めて10冊あまりを、北京大学気付けで贈本した。よって先生からは、日本の印刷技術を絶賛した札状(11月7日付)をいただくのみか、その後も売れ行きぐあいを尋ねてこられた(翌年12月25日付)のも、20年前のことになるが、記憶に新しい。このころ1ヵ月間に3通の便りをたまわっているが、その1通(12月26日付)で、

“私はこの春から高血圧のため、5月からすっかり休養して、ときどき転地療養に出掛けている。教学と研究工作もしばしば停頓して、図書館活動も遠慮している状態である。しかし病状は逐次回復しつつある”とうけたまわったので、とても気掛りのため、お見舞いしたのであった。

ところが不例のみぎり



訳本の売行き状況を聴取されし原著者よりの書簡  
(1964年12月25日付け)

にもかゝらず、ほどなくまた『中国書史簡編』の改訂版を贈与された。そこでお礼を込めて、続いて翻訳許可を願って、『東海地区大学図書館協議会誌』に、67年より8回にわたって日本語版を連載したことがある。

このような関係で当初の約10余年間は、心のこもった文通をたまわるのみか、かつまた劉師の日中友好のためにという懇切なとりなしで、北京の対外文化協会を經由して、光明日報を始め、3種の新聞と、30種あまりの雑誌を、1週間ごとに、ときの勤務先である岐阜大学と拙宅あてに、ずっと贈呈されてきたありさまであった。でも友好のきずなも、整風運動の勃発に伴って、停頓の憂き目に遭ってしまった。

しかし幸いにも79年春、本学の神谷学長ご夫妻の援助と激励を受け、中国の大学図書館友好訪問の旅に派遣されて、北京大学を始め、武漢、中山、開封師範の各大学、その他の図書館や博物館など、17日間にわたって歴訪、交歓する機会に恵まれた。

とりわけ北大を訪問することは40年に及ぶ宿願であり、そのうえじかに劉先生に拝顔できるのも、楽しみのひとつであった。

やがてその日を迎えることができた。聞きしにまさる、およそ日本の大学とはけた違いの広大な規模と、亭々として天にそびえる巨木や、翠竹の織りなす風雅なたたずまいを背負っている、北大迎賓楼についた。楼のまえでは大学の責任者である著名な郭松年はじめ、学長事務室幹部の趙恩普、図書館学部の関懿嫻主任、付館長の梁恩莊、耿濟安、日本語科の顧海根、その他趙新目、史洪江ら、名だたる諸先生の出迎えを受け、拍手と握手を交わしたあと、懇談に臨んだ。

おりしも機をみて、待ち望んでいた劉師の安否について、おそるおそる伺ったところ、高弟の関教授を紹介されたので、用件を伝えた。すると先生はいまや80歳の高齢で、動脈硬化のため昨年後半から不例であり、記憶や判断力もかなり衰えられて、初対面のひととは面会謝絶であるむねを聞かされた。このときばかりは期待の琴線が切れてしまって、真にがっかりするばかりで、このうちは長命を祈念するよりほかなかった。

さて交歓のあとバスにて、かげろう棚引く広やかな池を左に見て、望洋たるキャンパス内を案内され、新装なったばかりの伝統ある中央図書館を、ひとわたり見学することができた。ところが蔵書数350万冊、そのうちの日本書20万冊のなかにも、職員170名のうち、担当者のひとりに、さきの寄贈ずみの訳書のことを尋ねてみたが、四人組の断圧のためか、ついぞ見かけることはできなかった。

よって帰り際に、携行していった1冊を贈呈するとともに、一方その売れゆき状況を尋ねられたくだんの書簡を関女史にお見せしたところ、劉先生との昵懇の關係に驚かれたのであった。果して帰国するや、そのあとを追うようにして、さらに残本があれば提供願いたいという、北大からの公文書に接したため、なけなしの1冊を贈って、その責を塞いだ。

このむねを初版本の生みの親である理想社の佐々木会長に耳打ちしたところ、増訂版を発行しようという運びになった。でも病苦に呻吟されている原著者からの翻訳権を得ることで、はたと行きづまってしまったのであるが、北大の教授陣や、日本人教師岡崎兼吉先生らの苦心のとりなしで、家族の了承も得られ、どうにか発刊することができた。そこでふたたび劉先生はじめ、北大関係者に贈本することができた。



しかしながら無念にも、それこそ到着寸前、1980年6月27日午前3時50分、われわれの切なる祈念も空しく、とわの眠りに就かれてしまっていたのである。ときに81歳。18年ぶりに面目一新して発行できた増訂版に、すんでのところで触れただけなかったことは、よくよく不運であったというほかはない。

さてこの落胆のめぐり合わせに際会してしまったが、ついでには老師の訃報<sup>1</sup>をいち早く伝えてくれたのは、前述の鄭先生である。しみじみ綴られた女文字の貴簡をとおして、まな弟子としての悲痛きわまりない心喪の胸中が拝察されて、感無量であった。

目を閉じて在りし日を偲べば、海を隔てたこの若輩の子細な質問にも、即刻、回答を寄せられたことも、しばしばである。なやましき婦人を抄き込んだ和紙様の便箋に、墨痕鮮やかな毛筆で、ときには幽雅な認印まで施した書簡の末尾は、決して平隠ではなかった時代的背景にもかかわらず、近き将来における日中友好を確信し、いろいろと心温まる文字で結ばれているのが常であった。

さるときまた、ふとお願いしていた陳東原の著書『古今典籍集考』の古書を、上海出張のおり、たまたま古書店で見かけたとして、忘れかけていた数年後、本屋のラベルを添附したまま、老師の懐しい署名入りで恵存してもらったことも、いまにしてとてもうれしく、回想されてならない。

ここにきて、かねてたまわってきた書信を読み返ししながら、何年このかた鶴首してきた日中友好のその日を、いまこそ迎えているとき、ひたすら健在なりせばと、畏敬の思いを込めて願われるばかりである。

## 2. 別離を惜しむ人びと

なんといっても、亡き王重民先生と、いちずに北大図書館学部の創設、躍進に半生を捧げられたばかりでなく、党と政府の真意を熱愛し、中国における近代図書館の基盤を築いてきた大御所としての劉老師にふさわしい、盛大な北京大学葬であったといわれる。

そのうえ奇しくも、ともに書誌学の泰斗のひとりで、日本にもなじみの深い趙万里先生の追悼式が挙行された2日後の7月4日に、ところも同じ八宝山革命公墓において営まれたのである。

中華人民共和国教育部、国家文物事業管理局、中共北京市委教育部及統戰部、九三学社北京分社、中国図書館学会、北京図書館、甘肅、吉林、天津等の省市図書館学会代表を始め、丁志剛、馮定、江明、劉李平、武衡、季羨林、黃辛白、韓天石、錢三強ら、いまをときめく学会、政界に名を成す大家が、花輪を捧げた。

葬儀委員長は北大の張萍副学長、参列した名士は、なおも王路賓、胡耀輝、袁翰青、鄧麻銘ら始め、全国文物工作會議の全体図書館代表や、中国古笈善本書総目編集委員会、北大ほか各大学の代表や、全国に散在する教え子たちも、訃報<sup>2</sup>を聞いて駆けつけた。

北大の王竹溪副学長による切々たる弔辞には、嗚咽<sup>3</sup>以外に寂として声なく、いまさらのごとく偉丈夫の、半世紀あまりにわたる身を賭<sup>4</sup>しての貢献ぶりに思いを馳せて、とわの別れを惜しんだのであった。

## おわりに

われわれはこのたび、劉国鈞先生の膨大にして多岐にわた

る業績を目の当りにしつつ、御大の人物像を追慕して、私事におよぶむきご海容をたまわすることを願って、その軌跡を集大成することに努めた。

しかしながら力不足のゆえに、あまりにもおこがましい限りであったが、このうえとも大方の示教を仰ぎたい。

ついでには拙稿を執筆するに際して、既述したように東京在住の佐々木敏雄、橋本紘治両先生には、多大の尽力をたまわり、LCのMARCの項では、本学の松尾良克講師、また、岐阜大学附属図書館電算化プロジェクトチームの主役でもある棚橋章君からは、専門的な立場から指導を願った。

さらに中国では、北京大学の鄭先生はもとより、中山大学の連珍館長や、このほど組織強化がなされたばかりの、武漢大学図書館情報学院の黃宗忠副院長、またその武大出身で、武漢外国語学校日本語教師の楊志清先生からも、われわれ3名に対して寄せられた資料の供与や、過分の期待と激励も、身にしみて痛感している。

日中にわたる諸賢には、われわれと子ども、あれこれおしなべておわびするとともに、心から謝意を表したい。

## 注

- 1) ①松見『中国図書館学・書誌学の泰斗：劉国鈞先生のこと』東海地区大学図書館協議会誌 No.2 (1957) PP. 3—5  
②松見『偉大なる図書館学者劉国鈞先生——あいつが中国図書館界の要人の他界をめぐって』同上誌 No.26(1981) PP. 2—6  
③松見『図書館をつくった人々 ②劉国鈞』JLA 図書館雑誌 Vol.76 No.3 (1982) PP. 151—152  
④劉国鈞著 松見訳『図書の歴史と中国』初版 理想社 (1963) 訳者あとがき PP. 247—250  
『同上』増訂版 (1980) 訳者あとがき PP. 247—256  
⑤劉国鈞著 鄭如斯共著 松見訳『中国書物物語』創林社 (1983) 訳者あとがき PP. 205—217
- 2) ①松見『日中図書館界の虹(にじ)』東海地区大学図書館協議会誌 No.18 (1973) PP. 6—11  
②松見『図書館をつくった人々 ③杜定友』JLA 図書館雑誌 Vol.76 No.5 (1982) PP. 255—256  
③松見 井上 児玉『間宮不二雄大人与中国図書館人との交流』短期大学図書館研究 No.4 (1983) PP. 4—6  
④松見『中国近代図書館の開拓者——杜定友の人となりとその活動』日本図書館学会年報 Vol.30 No.4 (1984) PP. 159—168
- 3) ①松見『王雲五：中外図書統一分類法の構成と展開』日本図書館研究会 図書館界 Vol. 21 No.1 (1969) PP. 8—18  
②松見 注2) ①P. 7  
③加藤宗厚『図書分類法に於ける杜定友と王雲五』JLA 図書館雑誌 No.112 (1929) P. 111  
約60年前における、興味深い記事である。
- 4) ①盧震京『図書学大辞典』台湾商務印書館 (1971) PP. 277—278  
②沈曼鈞『金陵大学中学部図書館概況』中華図書館協会 図書館学季刊 Vol.6 No.1 (1932) PP. 127—128
- 5) ①松見『東洋における西欧目録法の撰取——喬衍琯と藍乾章の見解について——』日本図書館学会年報 Vol.20

- No.2 (1974) PP. 57—58
- ②児玉 山内 松見『DC, EC ないしは LC の東漸と、漢籍分類法をめぐる確執』東海女子短期大学紀要 No.11 (1985) P.111
- 6) 北京大学の由緒については、例えば近々発表された次の論文によっても、浮き彫りにされる。
- ①王世儒『蔡元培先生与図書館事業』中国科学院図書館図書情報工作 (1980) No.3 PP. 3—6
- ②梁柱『蔡元培先生与図書館事業』北京大学学報 哲学社会科学版 (1980) No.2 PP. 9—16
- ③肖超然〔等〕『李大剣在中国共產主義運動中の歴史地位』同上学報 (1979) No.6 PP. 2—14
- 7) 黄宗忠『武漢大学図書館学系六十年』武漢大学学報 哲学社会科学版 (1980) No.6 PP. 78—85
- 8) 松見 注2) ①PP. 1—12 ②PP. 165—166
- 9) 『劉国鈞図書館学論文選集 附録劉国鈞先生著訳系年目録』 (1983) PP. 422—432
- 10) 原載『文華図書季刊』 (1931) Vol.3 No.3 選集本 PP. 63—71
- 11) 原載『浙江省図書館月刊』 (1932) Vol.1 No.9 選集本 PP. 72—75
- 12) 原載『図書館』 (1962) No.2 選集本 PP. 270—274
- 13) 松見 注5) ①P.111 ②PP. 57—58
- 14) 王振鵠『図書館與図書館学』中国図書館学会 大学用書——図書館学 台湾学生書局 (1974) P.59 P.85
- 15) 黄宗忠『加强図書館学基礎理論的研究与發展』武漢大学図書館学系 図書情報知識 (1984) No.3 P.9
- 16) 王振鵠 注14) PP. 69—70
- 17) 王振鵠 注14) P.63
- 18) 原載『中国科学院図書館通訊』 (1957) No.1 選集本 P.132—138
- 19) 児玉 山内 松見 注5) P.121
- 20) 黄宗忠 注15) P.9
- 21) 文化学院図書館研究班『社会主義図書館学概論』北京図書館 図書館学通訊 (1959) No.1 P.1
- 22) 佐々木敏雄先生よりたまわった、東京都立日比谷図書館『ひびや』 Vol.20 No.2 (1978) P.52
- 23) 原載『図書館学季刊』 (1927) Vol.2 No.2 選集本 PP. 37—47
- 24) 原載『図書館工作』 ((1956) No.5 翌年高等教育出版社より、単行本にて発刊
- 25) 劉国鈞遺稿『中国図書分類法の發展』図書館学通訊 (1981) No.2 P.47
- 26) 児玉 山内 松見 注5) ①PP. 113—114
- 27) ①姚名達『中国目録学史』商務印書館 (1938) PP. 161—166
- ②白国応『図書分類学』北京 書目文献出版社 (1981) PP. 92—108
- ③嚴文郁は『図書館学季刊』 (1929) Vol.1 No.4 PP. 529—538にて、LC の詳細な紹介をしている。そのなかで、現在 (57年前) 中国が直面している図書分類の問題は、30年前の LC の情景と、きわめて酷似しているとの意味深的ともいえる発言がある。
- 28) 劉国鈞 注25) P.47
- 29) 白国応 注27) ② P.93
- 30) 劉国鈞 注25) P.47
- 31) 劉国鈞『現代中文図書館学書籍詳』図書館学季刊 (1926) Vol.1 No.2 PP. 346—348
- 32) 劉国鈞 注25) PP. 49—50
- 33) 劉国鈞 注25) PP. 53—54
- 34) 江風『談談向蘇聯學習的問題』図書館工作 (1959) No.10 P.8
- 35) 黄宗忠 注15) P.9
- 36) 江風 注34) P.8
- 37) 劉国鈞『中国書史簡編』北京 高等教育出版社 (1957) PP. 1—10
- 38) 劉国鈞『中国古代書籍史話』中華書局香港分局 (1973) 前言
- 39) 黄宗忠『新中国図書館事業三十年』湖北省図書館学会1979年年会論文選 PP. 1—9
- 40) 原載『図書館工作』 (1975) No.1 選集本 PP. 317—329
- 41) 原載『図書館工作』 (1977) No.2 選集本 PP. 330—340
- 42) King, Gilbert W; Automation and the Library of Congress; a Survey Sponsored by the Council on Library Resources, Inc., Library of Congress, Wash., D. C., 1963, 88p.
- 43) IFLA(International Federation of Library Associations and Institution)
- 44) ISBD(International Standard Bibliographic Description). MはMonographsの、SはSerialsの、それぞれの略。
- 45) Avram, Henriette D; The MARC Pilot Project: Final Report on a Project Sponsored by the Council on Library Resources, Inc., L. C., Wash., 1968, 183p.
- 46) ちなみに、次の文献を参照すれば、その後における標準化の成果が首肯されるであろう。
- ①中国図書館学会『図書館学通訊』 (1980) No.2 PP. 7—16 左の号には、文献工作標準化問題が特集されて、次の諸氏による現状、問題点、展望に関する、権威ある記事を登載している。
- 載荷生(国家標準總局標準化綜合研究所負責人)
- 張征秉(中国科学技術研究所党的領導小組副組長)
- 朱南(全国文献工作標準化技術委員會秘書処副主任)
- 閻立中(全国工作標準化技術委員會目錄著録分委員會主任委員)
- ②黄宗忠『図書館の現代化』武漢大学図書情報学院『図書館学導論』 (1986) PP. 619—655
- ③黄俊貴『関于文献目錄著録標準格式問題』中国科学院図書館 図書情報工作 (1980) No.3 PP. 17—22 ついてはこの論文(p.18)には、ISBD および AACR II を踏襲したskeleton cardとmain entry の実例が示されているので、後者を簡化文字のまま転写して参考に供したい。

例一：中文图书基本著录

著录正文	著录标目	zài péng zǒng shēn biān 在彭总身边 1950—1966 (警卫参谋的回忆)
		景希珍口述 丁陆炎整理 成都 四川人民出版社 1979年6月(1979年11月人民出版社改版重印) 131页 有图 32开 0.32元
注释		本书作者景希珍是彭德怀同志的警卫员,从1950年—1966年的十七年间,一直跟随在彭总身边。他以自己的亲身经历,真实地记下了彭总光彩照人的品格和所蒙受的不自之冤,控诉了林彪、“四人帮”对老一辈无产阶级革命家的残酷迫害。回忆分四个部分,在朝鲜战场;在国防部长任期内;在吴家花园;在大西南。
	业务注记	44-12(70) 1251 44.651 K259 川79-65-1(31) 1980年1月29日编印 11118.28 80-0786

例二：西文图书基本著录

著录正文	著录标目	Roberts, T. R. Radiochromatography, the chromatography and electrophoresis of radiolabelled compounds. Amsterdam, Elsevier, 1978. 174p. illus. Ref. (Journal of chromatography library, v. 14)
	注释	放射色谱法: 放射标记化合物的色谱法和电泳法
业务注记		0858.1 ○ 54.8471/R647
		F121/107 (1,30)

## Summary

# LIU GUO-JUN AND HIS CONTRIBUTION TO THE MODERNIZATION OF LIBRARIES IN CHINA

Takano Kodama, Hiroe Yamauchi, Hiromichi Matsumi

Liu Guo-jun, best known for his invaluable contributions to the modernization of library science in China over a period of more than 50 years, represents a great figure in his field in China. Even after his death on June 27, 1980, at the age of 81, his writings have continued to be edited and put into publication by his followers.

Liu Guo-jun was born in Nanjing. He graduated from Jinling University, the birthplace of library science in China, and went on to graduate school in Wisconsin, where he received his Ph. D. Upon his return to China in 1925, Liu Guo-jun, then 26 years old, attained a post at Jinling University as a professor and head librarian.

In the years that followed he worked in several different universities as head librarian and dean of the department of humanities as well as a professor of library science.

In 1951, at the age of 52, he was called to Beijing University, a post which he gladly accepted. During the next 30 years, he devoted himself to the founding and development of the university's Department of Library Science. In grateful recognition of his in-

numerable contributions to their university, an elaborate funeral service was performed for him at Beijing University.

In the course of his life he wrote more than 200 books, articles and translations, not only on the subject of library science, but on such versified topics as philosophy, literature and religion, to mention a few.

His most notable contribution to his field was the introduction of the western system of libraries to China, especially the introduction of the MARC of the Library of Congress.

In light of the fact that he suffered from persecution by Lin Piao and Sirenbang "the Gang of Four" during the decade of the Cultural Revolution, one cannot help but admire his strength of spirit and devotion to his work.

Thus, this paper is to honor the memory of Liu Guo-jun and illustrate some of the many tributes that came his way over the more than half a century of his scholastic career, mainly by introducing his innumerable articles and books.

(司書, 司書教諭課程・図書館学)